

古書と私

中根 貞幸

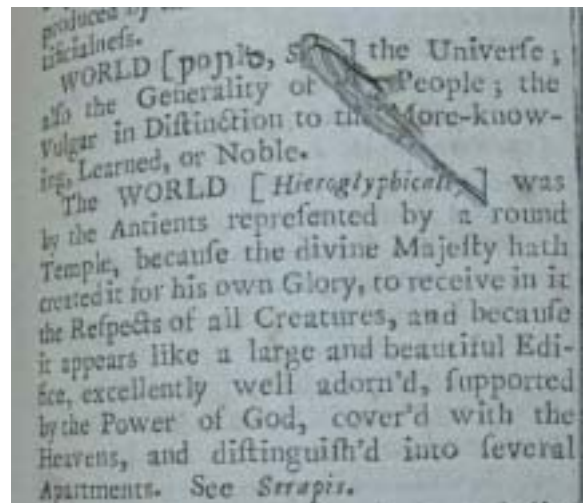
図書館には、においがある。特に、書庫に入ると、どこの図書館でも同じようなにおいがする。古書のおいである。埃っぽい、幾分鼻を刺すにおいだ。私は嫌いではない。神田神保町の古書街で、ふらっと古本屋に足を踏み入れると、どこも古本のおいが充満している。あれと似ている。

日本で「古本」というと、安っぽい大衆本かマンガ本を連想する人が多いだろう。最近では、そのような本しか扱わない古本屋が殆どなので無理もないことだ。ところが、イギリスで古本（secondhand books）として流通しているのは、主に教養書や専門書であって、「古本」のイメージが日英では違う。イギリスの古本屋には、やはり古書のおいがする。

そのにおいに惹かれてか、古本には虫がいることがある。「本の虫」という比喻を知らない学生はまずいないだろうが、本の虫を見たことのある学生はどれほどいるであろうか。殆どいないのではあるまいか。日本では本の虫を「紙魚」という。体長が小指の先ほどもあって、モヤシのようにいかにもひ弱だ。これは欧米の本の虫（booklouse）とは別の種類である。booklouse は体長2ミリにも満たない小さな虫で、本に針で突いたような穴を穿ける。もっとも、何が食ったかと思うような大きな穴を穿けることもある。虫食いは書物には大敵である。bookworm という語は無論あるが、こちらは日本語の「本の虫」と同じく、比喻的な意味で用いられることが多い。

私は本の虫ではないが、古書は好きだ。伝統の国、イギリスの大きな魅力の一つは古本屋である。大学町なら幾つもの古書店が軒を列ねる。学者の町なら不思議なことではない

が、小さな町や村にもたいてい古本屋があって、中には現在でも貴重な学術書が転がっているのには驚かされる。イギリス人が好む田園地帯コッツウォルドの小さな古書店では、*Sawles Warde*（初期中英語の説教書）が無造作に床の上に置かれていた。当時、この本は日本はおろかイギリスでも容易に入手できないものであった。紙表紙は取れかかり、薄汚れ、書き込みも随所に見られたが、手許に置いておきたいものだったので、すぐに購入した。値段は信じられないほど安かった。これを僥倖というのであろうか。



[筆者が所蔵する Nathaniel Bailey の *The Universal Etymological English Dictionary* (1737) の一部。虫に食われた大きな痕があるが、一応読める。上から, S[ax.], [the] People, t[he M]ore-knowing である。]

大学町オックスフォードには世界一かと思われるほど大きなブラックウエルという書店がある。ロンドン大学の近くにはディロンズという百貨店かと思間違うほどの書店があるし、トテナム・コート・ロードにはフォイルズという大きい整理がやや杜撰な本屋がある。それぞれに魅力はあるが、私はブラック

ウエルが好きである。学者のパブと言われるだけあって、常時十数万の本を擁しているそうだ。ブロード・ストリートを含んで、世界に冠たるボドレアン図書館と対峙している。正面の入口は大きくないが、これがイギリスの懐の深さかと思ってしまう程奥は広い。新刊が殆どだが、2階と3階には古書のコーナーも設けてある。一般書から専門書まで所狭しと並んでいる。一端、書棚の前に立つと、つい長居をしてしまう。酒好きがビールを楽しんでパブを離れられないように、本好きには飽きることのない店である。

オックスフォードから8マイルほど離れたファイフィールド・マナーという鄙びた村には、Blackwell's Rare Booksがある。ここはいわゆる^{きこうしょ}稀観書だけを扱う店である。本屋といっても、領主の館（manor house）をそのまま使っているので、壁に蔦が這うその外観からは店という感じがしない。低いアーチ形の入口から腰を屈めて入って行くと、中には皮装の稀観書や貴重本が、まるで展示場であるかのように並んでいる。数百ポンドはするような本ばかりである。大きな梁と厚い壁に護られた稀観書には歴史の重みを感じられ、その威容に圧倒される。



Blackwell's Rare Books at Fyfield Manor

週末になると、近隣の町まで足を延ばして、古書店を訪ねた。そのようにして見つけた本には貴重なものがある。いわゆる学術書ではない本でも、英語の本当の姿を伝えてくれるものがあるからだ。John Moore の *You English*

Words (1961) がその一つである。どことなくポエティックなタイトルに惹かれて買った。事実、これは Edward Thomas という詩人の詩からとったものだとは後で知った。この本を拾い読みしていたら、contemporary という語に対する 1950 年代のイギリス人の態度が書かれていた。この語は、今では「現代的な」という意味で用いても構わないが、当時は、家庭雑誌や女性雑誌などで見かけられるようになった流行語で、一般的にはこの意味での使用は許容されていなかったというのである。そんなことは辞書を引いても分らない(但し、*The Chambers Dictionary* (1998) は簡単にこのことに触れている)。この種の情報は学術書からは得られないものだ。

イギリスでは各地に古本市が立つ。通りを歩いていると、「Book Fair」という立看板が目には止まる。建物の一角を業者が借りて出店する。自前の店を持っていない業者仲間が集まってくる。こんな市には一般市民も学者も馳せ参じる。業者と顔見知りになると、こちらの依頼を聞いてくれて、次に行くと、ちゃんと欲しい本を入手しておいてくれる。どれほどの学識の持ち主かは定かでないが、本の知識は豊富である。日本にまでカタログを送ってくれる業者もある。古本市では値段の交渉ができる。駄目元でやってみる。耳を貸そうとしない頑固者もいるが、買いたい本への関心と愛着を示すと、かなり負けてくれるのもいて嬉しい。

人文科学では古書は大事だ。もう十数年も前のことだが、アメリカの著名な文芸評論家 Lionel Trilling が書いた短篇小说を編注したことがある。注というのは労多くして、功少ない仕事だ。ただ、どのような箇所にもどのような形で注を付すかで、その人の学識が丸見えになるので、恐ろしいものでもある。“The Other Margaret” (1945) という作品の中に、The books

were beginning to be too many for the small bookshelf, starting with *The Little Family* and going on to his own soiled copy of *The Light That Failed* that Margaret had unearthed. という箇所がある。主人公 Stephen Elwin が 15 才になる娘のマーガレットの部屋に入って、そこの様子を述べているところである。*The Light That Failed* が Rudyard Kipling の作品であるぐらいは分るが、*The Little Family* というのがよく分らない。注釈者にとって「不詳」とするのは不名誉なことで、それは避けたい。文脈から児童書の類だろうという想像はつく。しかし、確証がない。思い余って、あるアメリカ人にこの本を知らないかと手紙で訊ねたら、知らないとのことであった。しかし、その後、親切にも色々と手を尽くしてくれたらしい。その年のクリスマスには彼女から小さなプレゼントが届いた。開けてみると、何と、*The Little Family* という可愛い絵本が出てきた。これには感激した。Lois Lenski という挿絵画家が 1932 年に彼女の 3 才になる息子 Stephen のために作ったものだという。中味は当時のアメリカの典型的、理想的な家族の姿を描いたものだ。手の平に収まるミニチュア本だが、今でもこの絵本は優しさの香りを放っている。

インターネットのように便利なものがなかった十数年前にも、古書の探索には道具があった。行き当たりばったりの本屋を捜したりはしないものである。イギリス全土をカバーしている古書店のガイドブックがあったので、いつもそれを片手に歩いた。ロンドンだけなら、Martha Redding Pease の *The Bookshops of London*, rev. edn (London: Fourth Estate, 1984) が便利だった。今ならインターネットを通じて自分の部屋にい

ながらにして世界中の古本が手に入る。例えば、上に触れた *The Little Family* を abebooks.com で検索してみると、10 冊が売りに出ていることが分る。\$225 の高値をつけている業者もいるが、大体はその半値で売っている。さらに、この本は今なお愛読されているらしく、数十年の時を経て再版されていることも分る。私は abebooks の存在を知ってから、ここを通して何冊も古書を買った。以前から欲しかった本ばかりなのだ



が、どういう訳か電子取引きで得た古書にはなかなか愛着がわかない。

Lois Lenski, *The Little Family* (Garden City, NY: Doubleday, 1932) のカバー (dust jacket)。実物は 12 cm×12 cm。

私にとって古書は知識を与えてくれるだけのものではない。研究に必要なことは言うまでもないのだが、それ以上のものである。友といってもいいかも知れない。友は足で歩いて、直に会って、吟味して得られるものだ。その過程で、親愛の情が育まれてゆくのだろう。

(なかね・さだゆき 附属図書館長)

中国古典の図書分類法 - 学生に -

澤 崎 久 和

現在、日本の図書館の多くが日本十進分類法（NDC）という図書分類の方法を採用していることは、図書館を利用するたいのの人が知っているであろう。もし小説好きの学生なら、日本文学は910台、中国文学は920台であることも知っているかも知れない。むろん、読者の側からいえば、小説を読むためにそれがどのような分類に所属するかをいちいち知っている必要はないのであるが、図書館が書籍を収集保存し、利用者の希望に応じて閲覧に供するためには、収集された書籍が一定の秩序のもとに分類整理され、直ちに検索できる体制になっていることが必須である。そのさいの代表的な分類方法がNDCというわけである。

ところで、長い歴史をもつ中国では早くから独自の図書分類法が発達してきた。それは、分類を必要とするほどに膨大な量の書籍が古来生み出されてきたことを意味するとともに、分類のための価値基準が早くから発達していたということをも意味する。

中国におけるもっとも早い図書分類目録は、前漢末の劉向（BC77-6）等による「別録」「七略」とされる。その具体例は『漢書』芸文志に見ることができるが、のちには「経・史・子・集」という四種の分類、すなわち四部が成立し固定化した。経部は経書、つまり儒教の經典である『易経』『書経』や『論語』など。史部は『史記』『漢書』などの歴史書や伝記・地理・官職に関する書。子部は儒家・道家・法家など諸子百家の書。集部は詩や散文などの文学書。これをまとめて四部といい、各部のもとには類という下位分類が設けられている。たとえば、『論語』は経部の「論語類」に収められる、と

いった具合である。このような分類方法を「四部分類」ないし「四庫分類」と言う。

「四庫」とは四部の書が収められる書庫の意で、清の乾隆帝の時に編纂された一大叢書は「四庫全書」と称される（1780年頃成）。

四部分類による初期の目録として知られるのは『隋書』に収められる「経籍志」（7世紀）であるが、これには総計数万巻の書の書名・巻数・著者名等が著録されている。日本ではまだ『古事記』『風土記』や『万葉集』も生まれていない時代に、これだけの分量の書籍が整然と分類され列挙されているのは、まさに圧巻である。これらの書籍は今日散逸して見るできないものが多いけれども、後世の再編集を経て今に伝えられているものもまた少なくない。国家といわず個人といわず、四部の分類にしたがって書籍の収集と分類がきわめて熱心になされてきたことは、中国における「文」（「武」に対する「文」）の重視をよく物語っている。

ところで、先の「四庫全書」は広く天下の書籍を収集したきわめて大部の叢書であるにもかかわらず、実はこの中には、中国の古典と言えはだれもが思い浮かべる『三国志』や『水滸伝』、あるいは子供の頃にたいてい一度は読んだことのある『西遊記』などの小説は含まれていない。そもそも「四庫全書」にはこれらの長編小説を収める分類項目がない（これらを収めない「小説家類」は別個にあるが）。多くの人々に絶大な人気を誇る『三国志』や『水滸伝』がなぜ「四庫全書」には収められていないのか。それは、当時これらの小説はまっとうな士大夫（したいふ）が読むべき価値ある書物

とは認められていなかったからである。士大夫とは高等官の身分を持つ知識人の総称であり、四部分類を生みだし、そこに収められる書物を生みだし続けてきたのは、この士大夫層の人々に他ならない。

『三国志』や『水滸伝』はもともとあった歴史事実や事件が核となってそこにさまざまな肉付けがなされ、徐々に今日みられるような形に成長していったものであるが、「四庫全書」が編纂された18世紀にはとくに書物としての形を整えていた。それにもかかわらずこれらの書物が当時の一大叢書にそろって収められていないのは、要するに収めるほどのものではないと見なされていたからに他ならない。たとえば小説『三国志』は漢末から魏晉にかけての魏呉蜀三国の興亡という史実がもとになっているが、それが小説化される以前においては講釈師による語り物として演じられ、文字を知らない民衆の娯楽として広く親しまれてきた。使用される言葉も古来知識人が重んじてきた「文言」（ぶんげん）、つまり書き言葉とはことなっていて口語的要素を含んでおり、『水滸伝』にいたってはきわめて口語的である。口語は文言に対して「白話」（はくわ）と呼ばれ、白話によって綴られた小説は価値低きものとされた。「四庫全書」に収められなかった理由はここにある。

このように、四部分類は書籍を収集する段階ですでに取捨選択を行っているのであるが、収集された書籍もまた内容の如何と価値の高下とによって選択分類される。たとえば、四部のうち経部が最初にくるのは、儒学こそが士大夫必須の学問であり、経書は第一に学ぶべき根本の書と認められていたからに他ならない。これは四部の配列の問題であるが、同一部内においても先後がある。たとえば、諸子百家の時代、儒家とならんで代表的な思想であった道家の書は子部の道家類に属する。道家類は『隋書』

経籍志など当初の四部分類では子部の二番目という重要な位置に置かれていたのに対して、千年あまり後の「四庫全書」では釈家類（仏教関係）とともに子部の再末尾に押しやられてしまった。

儒家の内部においても、価値の高下による分類の変化が認められる。たとえば、四部の第一に経部が置かれるにもかかわらず、子部の第一にはさらに儒家類が設けられている。これは経部が儒学の最も基本的文献を収めるのに対して、子部の儒家類は『孟子』『荀子』など、諸子百家の一つとしての後世の儒家の書を収めるためである。前者はつまりは聖人の書であり、後者はそうとは認められていない。ところが、このうち『孟子』は唐代までの目録では子部に属していたにもかかわらず、宋代以降の目録では経部に所属を移している。経部に移ることによって、『孟子』はその他多数の思想書の一つから、儒学の経典の一つに格上げされたわけである。これは、『孟子』に対する評価が唐代までは賛否両論あつてなお定まらなかったのに対して、宋代以降ことに朱子などによって四書の一つとして重視されるようになったことと密接に関係している。『孟子』は経書の仲間入りを果たすことによって、その地位を揺るぎないものとしたのであり、四部においてある書物がどこに所属するかはたんに分類の問題にとどまらなかったのである。

このように、四部分類はその祖形にあたる『漢書』芸文志以来、その時々の書籍の多寡や価値観の変化に対応して、分類項目や配列の順序を手直ししてきた。そこで今度は逆に、分類体系の変化を追うことによって、時代による学問の動向や価値観の変遷をたどることもまた可能となる。

図書の分類がそれを生み出した文化圏の価値観を反映することは、むしろ古典時代の中国においてのみ当てはまることではな

い。西洋中世における最初の書誌学的分類とされる Gesner の分類は、あらゆる書籍を「哲学」として括り、これを基本的と予備的の二分したうえで、基本的に属する分類項目の基礎に「キリスト教神学」を据える。わが国では、江戸時代の末に塙保己一が古今の書を集めて編纂した「群書類従」が、分類の最初に「神祇部」を置き、次いで「帝王部」を置く。現在の中国にはいくつかの図書分類法があり、そのうち代表的なものは中国図書館分類法(最新は第四版)であるが、この分類法の最初に置かれるのは「マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想・小平理論」に関する書であり、その他の哲学や宗教はこの後に配される。これは四部分類において儒家の経部が最初に置かれ、諸子百家の子部と区別されるのにも似ている。中国図書館分類法の旧版には含まれていなかった「小平理論」が毛沢東思想と並んで冒頭に置かれるようになったのも、これが時代の変化にともなって新たに高い評価を得た結果と言えよう。

このように見てくるならば、一見特定の価値観に依らないように見える NDC の分類も、その冒頭に図書館学や書誌学、定期刊行物や新聞、百科事典や全集などから構成される「総記」を置くことによって、百年後二百年後にはその当時の学術の動向と価値観を反映した分類方法としてながめら

れるかも知れない。むしろ、古典時代の中国においても「四庫全書」とは別に仏教には「大蔵経」があり道教には「道蔵」があってそれぞれの分類基準をもつように、現代においても医学や理工系の分野においてはそれにふさわしい図書分類が行われている。NDC のみがすべてではない。また逆に、四部分類はけっして過去のものではなく、現在では『三国志』などの小説をも取り込みつつ、中国でも日本でも相当量の漢籍を所有する図書館においてはもっとも有力な図書分類法として広く採用されている。どのような分類法も、その時代や文化のすべてを覆うことはできないのである。

もし機会があれば、他国や他の時代、他の分野の図書分類法をながめてみるとよい。そうすれば、その分類法を作り上げた人々がどのような目でこの世界を捉えているかをうかがうことができるであろう。あるいはまた、日本以外の国で行われている十進分類法をながめ、その中で日本に関する図書がどのような位置にあるかを見るならば、これまた興味深い結果が得られるであろう。その意味で図書分類法は自他をながめ古今をながめる良きフィルターなのである。その後、フィルターをはずしてながめることがさらに必要だとしても。

(さわざき・ひさかず 附属図書館委員)

「教授が書いた教科書を使うな」

小 倉 久 和

ここ数年、自己点検・評価委員会が実施する学生の授業評価の集計結果報告書が毎年届けられる。評価自身は良いものもあるが、厳しいものもあり、反省材料の1つとなる。この報告書には自由記入のコメントもていねいに写し取られていて、標題の言葉は今年度の報告書の中にあつたものである。私は、以前からときどき定期試験時に授業の感想を書いてもらっているが、数年前に標題の文と同じ内容の感想が書いてあつたのを思い出した。先日、少人数教育の十人あまりのクラスで出席していた学生諸君に、私が自分で書いた教科書を使って授業をすることについて感想を聞いたが、とくに意見はなかった。面と向つては言いにくいのかもしれない。これを書いた学生がどのような意図で書いたかはわからないが、恐らく次のようなさまざまな感情の結果であろう。偉ぶって自分で書いた教科書を学生に売りつけるとはけしからん、〇〇先生は講義ノートを印刷して配るのにお前の教科書は高い、もっと偉い人の書いた教科書が一杯あるだろう、などなど。大学の教員はどういうつもりで教科書を書くのだろうか、自分の経験を振り返って考えてみたい。

日本では、高校までの教育は悪名高い学習指導要領（悪名高いにもかかわらず、かつ理由もなく内容が唐突に改編されるにもかかわらず、広範に流布するのは困ったことだ）に基づいている。使われる教科書は極めて制限された範囲の内容についてだけ書かれていて、しかもページ数が少なく薄いから、必要以外のことはほとんどふれられていない。私は、教育とは別の関心で米国の小学校から高校までの算数・数学の教

科書を購入したことがあるが、とても大部であるのに驚いた（小学校の教科書でも優に700ページ以上ある）。1年間の授業ではたとえホームワークを課したとしても700ページもやれるとは思えないから、自主学習の内容を大量に含んでいるのだろう。実際、小学生向けの教科書のなかにも読んでいて面白い話題があちこちにある。

大学では、教育の目標とカリキュラムは、大学の、学部・学科の自主的な判断ではあるが、社会的な要請と学生諸氏の学力・知識レベルに基づいて構成され、担当教員はその枠内で教育を担当する。しかし、大学で行われる授業科目は、実際には半期の授業だけで終わるわけではなく、たとえば基礎的科目といえども非常に広範な内容を持っているから、自主的な学習が欠かせない。枠を守っても授業だけでは済まないのである。上にふれた少人数教育の場で、ある学生が「授業中に全部分るように努力しているから、それ以外の勉強はしない」という主旨の発言をした。大学の単位制は、原則として

1 単位の学習＝（45 分の講義＋90 分の予習・復習という自主学習）×15 回』を基準としているとのことであるから、2 単位科目 1 つについては、週あたり 90 分授業以外に 3 時間の自主学習を要する内容になる。先の学生の発言の前半については、授業について行けない諸君が多い中で、大変重要な学習姿勢である。しかし、このことは授業内容が彼にとって希薄であつたことを意味するから、発言の後半はうなずけない。その授業科目は、授業の内容だけで成立しているわけではないから、もっと積

極的に関連知識を求めて自主学習すべきであろう。大学にはそれができるような環境が用意されているし、大学外にも多様な環境があるから、それらを積極的に利用することが大学生としての重要な姿勢である。私が大学生だった頃は、大学の授業の教科書以外に名著と呼ばれる教科書などを読むのが普通だった（たとえば高木貞治の「解析概論」は大部だが理系の学生には必帯で、たとえ読まなくても持って歩いている学生が大勢いた）。そういう本を読むと、ぼんやりした理解だった授業内容が良く分るようになる経験を何度もしたし、授業でふれられなかった知識を増やすこともできた。自分の狭い遠い過去の経験を押しつけるつもりは毛頭ないが、しかし、大学での勉強の基本が、内容的にも時間的にも自主学習であることは変わらないと思う。自分の要求と関心に従って取り組む積極的な姿勢に裏付けられた自律的な学習である。大学での授業は、そのヒントときっかけを与えるに過ぎないし、それを前提として構成されている。このことは、高校までの学習姿勢と大きく異なるもので、単に大学受験勉強との相違というより、高校までの教育体制、教育姿勢との相違である。

ある授業科目の担当を引き受けたとする。教科書なしに板書だけで授業を展開する教員もいるし、板書すらなく巧みな話術で学生たちの注意を引きつける名講義をする教員もいる。私はまず教科書をさがす。今の多くの学生諸氏は板書したことしかノートに取らない、口頭で話すことはメモをとらないので、必要なことをすべて板書しなければならないから、大変だし講義の能率が悪いからである。しかし、それ以上に、多くの諸君は参考書を購入して勉強することをしない（教科書すら購入しない諸君もふえてきた）から、授業後に理解の不足していた部分を見直したり、あるいは何年か経ってか

ら記憶を呼び戻したり確認するときに、何か手元に残っている必要があると思うからである。そして、できれば、授業ではふれることができなかった教科書の他の内容についても、自主的に勉強してほしいと思うからである。そのため、私は教科書の選定には頭を悩ます。

大学向けの教科書は、執筆者の考え方、世界観・教育観に沿ってその科目を体系付け、具体化したものである。大家の、大御所の著した教科書は、大変おもしろく、名著と呼ばれるものが多い。執筆者によって異なる記述方法や、世界観の相違による体系付けの仕方が異なるのも興味深い。そして何よりも自分の世界観が影響を受けるのがいい。しかし、そのような教科書はおおむね大部であり、また、世界観の相違があると授業でそのまま使うのがなかなか困難である。担当科目の枠組み（教育目標やカリキュラム、学生の質など）と合わないことも多い。担当した初期には既存の教科書を使うことが多いが、なかなか自分の思うような体系でかつ分かりやすい教科書は見つからず、教科書のあちこちをつまみ食いし、足りない部分を補足する。そのうち、講義ノートを自前で作成・印刷し、配付することになり、その体裁がととのってくると内容によっては出版社が引取って出版してくれることになり、そうして、自分で書いた教科書で授業をする、という経過をたどる。

教科書は、著者のその科目についての考え方や捉え方、世界観を、体系を組み立てて著している。私はいくつかの教科書を書いたが、教科書をまとめるときにはその点を強く意識した。欧米の大家の書いた教科書は大部なものが多いが、その語り掛けるような口調の文体にあこがれる。読むだけで分ってしまうような気がする記述である。日本の出版事情ではそのような大部な教科書は企画も困難だし、また、学生諸君がな

かなか購入してくれないから、出版しにくい。それでも出版社に無理を言って、授業では1/2から1/3くらいしかこなせないけれど、少々内容を欲張って体系付け、記述も少々冗長なくらいに書いてできるだけ分

りやすくなるよう心掛けている。そして、本当は、私の教科書だけではなく他の教科書も読んで、自分の考え方を作ってほしいと思っている。

（おぐら・ひさかず 附属図書館委員）

福井大学図書館所蔵の橘曙覧作「日本建国之吟」について

前 川 幸 雄

序

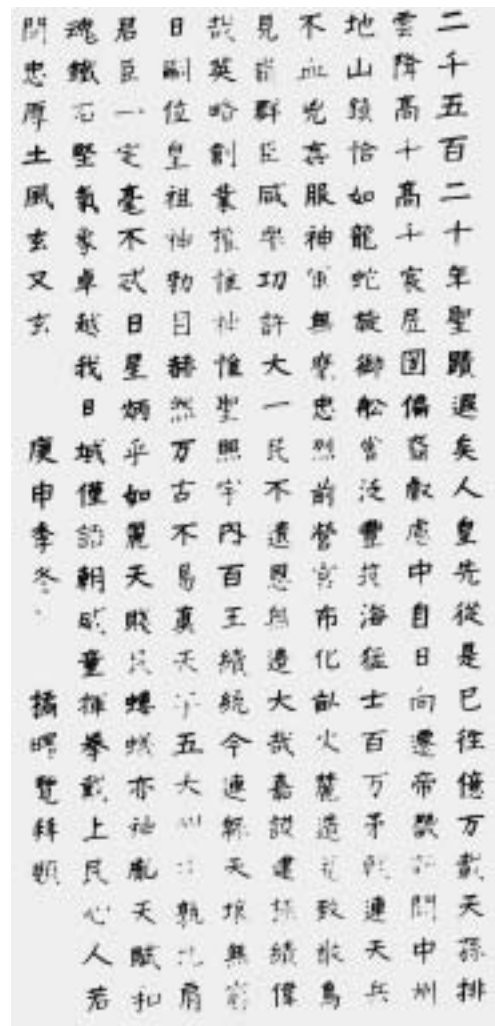
福井県の幕末の歌人として知られる橘曙覧の経歴や短歌についての研究が盛んに行われている。また、短歌の拾遺、遺墨の収集等の作業も進んで、先頃出された水島直文・橋本政宣編注『橘曙覧全歌集』（岩波書店発行）には先達たちの苦勞が収録されている。

ところが、橘曙覧が作ったとされる漢詩については、曙覧の作品の拾遺、遺墨の収集の中で取り上げられているだけで、作品についてはほとんど研究されていない。

例えば、ここに取り上げる「日本建国之吟」及び六首（合計七首）は、山田秋甫著『橘曙覧伝并短歌集』（中村書店発行）に有り、この他に、山田秋甫著『曙覧遺芳』（井手薫発行）、久米田裕編集『橘曙覧遺墨集』（金井学園発行）には各一首が記録されていて、合計九首が残されていることが分かっている。

橘曙覧の漢詩作品の「日本建国之吟」で揮毫されているものは、福井大学図書館所蔵作品の他に、県内に二、三点あることが分かっているが、未だ確認できていない。そこで、福井大学図書館が所蔵する、橘曙覧作「日本建国之吟」について紹介する。

この作品については、福井大学教育地域科学部紀要 第1部 人文科学（国語学・国文学・中国学編）第52号2001年12月発行に『橘曙覧作「日本建国之吟」考』を前川幸雄・前川正名・水島直文が執筆、発表しているので、ここでは簡単に紹介する。



一、本文及び書き下し文

「日本建国之吟」（原文には「題」なし。
仙石亮氏題の箱書きによる。）

（本文） （書き下し文）

- | | |
|-----------|--|
| 1 二千五百年 | 二千五百年 |
| 2 聖蹟遐矣人皇先 | 聖蹟 ^{はる} 遐かなり 人皇の先 |
| 3 從是已往億萬載 | 是れ從り ^{いおう} 已往 億萬載 |
| 4 天孫排雲降高千 | 天孫 雲を排して 高千に降る |
| 5 高千宸居罔偏裔 | 高千の ^{しんきょ} 宸居 国の ^{へんえい} 偏裔 |
| 6 叡慮中自日向遷 | 叡慮中 ^{ひゅうが} 日向 ^{うつ} 自り遷る |

- 7 帝畿新關中州地 帝畿 新たに關く 中州の地
- 8 山鎮恰如龍蛇旋 山の鎮^{しづ}まること 恰かも 龍蛇の 旋^{めぐる}るが如し
- 9 御船嘗泛豐筑海 御船は 嘗^{うか}て泛ぶ 豊筑の海
- 10 猛士百万矛戟連 猛士 百万^{ぼうげき} 矛戟連なる
- 11 天兵不血兇姦服 天兵 血^{ちぬ}らずして 兇姦^{きよう} 服し
- 12 神軍無麾忠烈前 神軍 麾^き無く 忠烈^{すす} 前む
- 13 營宮布化畝火麓 宮を営みて 化を布く 畝火の麓
- 14 芟瓮致敬鳥見巔 瓮を芟り 敬を致す 鳥見の巔
- 15 群臣咸舉功許大 群臣^{みな} 咸 挙ぐ 功は許大
- 16 一民不遺恩無方 一民 遺らず 恩は無辺
- 17 大哉嘉謨建極績 大なるかな 嘉謨^{かぼ} 建極の績
- 18 偉哉英略創業權 偉なるかな 英略 創業の權
- 19 惟神惟聖照宇触 惟れ神^{すけ} 惟ち聖 宇内を照らし
- 20 百王續統今連綿 百王 統を續ぎ 今に連綿
- 21 天壤無窮日嗣位 天壤 無窮 日嗣^{ひつぎ}の位
- 22 皇祖神勅目赫然 皇祖の 神勅 目^{かくげん} 赫然
- 23 万古不易真天子 万古 不易^{ふえき} 真天子
- 24 五大州中孰比肩 五大州中 孰^{いず}れか 比肩
- 25 君臣一定毫不忒 君臣 一定して 毫も忒^{たが}はず
- 26 日星炳乎如麗天 日星 炳乎として 天に麗^{かが}るが如し
- 27 賤民螻蟻亦神胤 賤民 螻蟻^{ろうぎ}も 亦 神胤^{また}
- 28 天賦和魂鐵石堅 天賦 和魂 鐵石堅し
- 29 氣象卓越我日域 氣象は 卓越す 我が日域
- 30 僅語朝威童揮拳 僅に 朝威を語れば 童も 拳を揮ふ

- 31 戴上民心人若問 上を戴く 民心 人若し 問はば
- 32 忠厚土風玄又玄 忠厚 土風 玄^{また} 又 玄 庚申 季冬 橘曙覽 拜題 庚申 季冬 橘曙覽 拜題

箱書（表）「日本建国之喟 橘曙覽作并書」
（裏）「昭和辛未初春 後學仙石亮題
（印・仙石亮・白文）」

（本紙）横、五五．五cm 縦、一二九．五cm。
（表装）横、七〇．〇〇cm 縦、二二〇．〇〇cm。

二、通釈

- 1 日本国が建国（神武天皇が即位）されてから、今年で二千五百二十年になるが、
- 2 天子の功績は神武天皇に先立つこと遙か昔、神代からのことであつた。
- 3 現在より既に過ぎ去ることは億万年にもなろうか。
- 4 天照大神の孫ニニギノミコトが、雲を押し分け、高千穂に降りられた。
- 5 高千穂の天子の居城は遠い辺境の地であつたが、
- 6 天子の御心のうちは日向から遷られた。
- 7 天子の都は、新たに中央の地にひらかれ、
- 8 山の鎮まることはまるで龍や蛇が旋るようであつた。
- 9 天子はその昔、御船を豊筑の海に浮かべ、
- 10 勇猛な兵士たち百万人の武器が連なつた。
- 11 天子の軍隊が進軍すれば、血を流さずとも凶徒が服従し、
- 12 天子統率の軍隊は、進軍の旗の合図が無くとも忠烈の士は進んでいった。
- 13 こうして畝傍山の麓に宮を造り教化をしき施し、
- 14 そして鳥見山のいただきに瓮を造り敬意を尽くした。
- 15 群臣達はみな、功績あげ、その功績はまことに大きく、

- 16 たった一人の民とて遺らず天子の恩恵
が及び、恩恵の及んだ地は広々として限
りがなかった。
- 17 人倫道德の模範標準をたてて万民の法
則を定めたその功績は、偉大なることは
限りがなく、
- 18 すぐれたはかりごと、国の基礎をつくり
しはかりごとは、偉大なることが限りが
ない。
- 19 聡明な帝は、世の中ををあまねく照らし、
- 20 多くの王が血統を受け継ぎ今も続いて
いて途絶えることがない。
- 21 天子の位を嗣ぐことは、天地のように永
久に続き、
- 22 天照大神の神勅のおことばは、今も光り
輝いている。
- 23 真の天子は遙かな昔からかわらず、
- 24 五大州中で誰が肩を並べることができ
ようか。誰も並べることができない。
- 25 君臣間の義が一つに決まっていって少し
もたがうことがなく、
- 26 そのさまは日と星が空に光り輝いて、天
にかかっているかのようだ。
- 27 身分の低い民であろうと、けら・ありの
如きつまらないものであろうと、すべて
天子の子孫なのであり、
- 28 生まれつき天から与えられた日本固有
の精神は、鉄や石のように堅いのである。
- 29 その気性・気質は、我が日本は、はるか
に優れており、
- 30 朝廷や天子の威光をほんのわずか語った
だけで、童も愛国心に猛り拳を揮うほど
である。
- 31 天子を戴く民の心を人が若し問うたな

らば、

- 32 まごころがあつて手厚い、その土地の気
風は、神妙であつて深遠なることかぎり
がなく、語り尽くせるものではない。

万延元年 庚申之歳（1860）十二月
橘曙覧 謹んで書す

三、押韻・平仄

第一句、年、以下偶数句、先、千、遷、
旋、連、前、巔、邊、權、縣、然、肩、天、
堅、拳、玄、で押韻している複偶句韻であ
る。すべて「平声先韻」で一韻到底格であ
る。平仄は考慮しておらず、古体詩に分類
されよう。

四、橘曙覧の略歴

橘曙覧（1812～68）は文化九年（1812）
五月（日時は不明）、越前福井城下の石場
町（現、福井市つくも一丁目）に生まれた。
父は紙筆墨を商うかたわら、家伝薬巨朱子
円を製造販売する老舗の主・正玄（正源）
五郎右衛門（1783～1826）、母は府中（現、
武生市）の酢醸造元・山本平三郎の長女・
都留子（鶴子）。次男であつたが、長男の
夭死により嫡子となった。

慶応四年（1868）五月二十八日、病床に
臥し、同年八月二十八日、病没。享年五十
七歳。明治改元の十日ほど前のことであつ
た。坂井郡大安寺村田谷（現、福井市）の万
松山に葬られる。

五、制作年

古体詩「日本建国之咍」（題は仙石亮氏
の命名）は、安政七年、万延元年（1860）の
十二月に曙覧が揮毫したといわれるもので
ある。（2002年2月6日記。）

（まえがわ・ゆきお 教育地域科学部教授）

特集 - 「学生に読んで欲しい本」(第2回)

多角的に分析しながらスポーツ・運動に取り組もう！

宗 倉 啓

多彩な保健体育の研究領域

保健体育には多くの研究領域が存在しています。たとえば日本体育学会に所属する専門分科会だけでも、体育原理、体育史、体育社会学、体育心理学、運動生理学、バイオメカニクス、体育経営管理、発育発達、測定評価、体育方法、保健、体育科教育学、スポーツ人類学があり、さらに各分科会ごとに綱目が設けられています。ふたつ、例をあげます。バイオメカニクスでは、「綱」として運動機能、測定・分析法、平衡運動、移動運動、投打運動、環境・設備用具、運動技術などがあり、このなかの運動機能の「目」だけをとりあげても筋出力、神経支配、エネルギー源、運動効率、制御・調節などに分けられます。また保健の綱では、健康管理、健康教育、学校保健、地域保健、産業保健、保健運動、安全教育・管理などがあり、健康教育だけでも健康診断、健康相談、疾病対策、栄養・食品、生活設計、回復期管理、リハビリテーションといった目があるのです。

このように、保健体育には数多くの研究領域があり、個人的な絞り込んだ研究テーマも併せるとじつに多彩なのです。実際みなさんが行っているスポーツや運動も、たんに「がんばる」「思いっきり」といった根性や力動的側面のみで終始するのではなく、できたりうまくなるためには、運動生理学・心理学、バイオメカニクス、運動学、栄養・食品などの知見を得て多角的に分析しながらスポーツにかかわる必要があるのではないのでしょうか。これらの専門書や雑誌はじつに数多く出版されています。また

自然科学的な知見だけでなく、戦術や技術の歴史を調べることも必要でしょう。首から下だけがスポーツ・運動ではありません。首から上も使って「考える・わかる・こうしよう・できる」を目指すことをお勧めします。

human movement

人の運動 (human movement) には、大略して歩く、走る、跳ぶ、投げる、捕る、打つ、蹴る、泳ぐ、登る、振る、まわる、転がる、滑るなどがあります。スポーツにはこれらの基礎的運動が含まれています。たとえば「跳ぶ」は、前方への最長距離を求める走り幅跳びだけではありません。跳びつく、跳び越す、跳びのる、跳び上がる、跳びおりる、跳び渡るなどもあります。宮下充正氏監修の「跳ぶ科学」(1990年、大修館書店。この他にも打つ、投げる、走るなどがシリーズとして刊行されている)では、この「跳ぶ」を主に力学的、運動生理学的に分析し、そのメカニズムを明らかにしています。垂直跳び、立ち幅跳び、走り幅跳び、三段跳び、走り高跳び、棒高跳び、球技の中の跳躍、体操競技や水泳競技での跳躍、スキージャンプ、縄跳びなどの「跳ぶ」は何がどのように異なるのか？ 美しい動作とは？ 障害と予防は？ 年齢に応じた指導とは？ など、じつに多彩です。

堅い話だけではありません。楽しい話題もあります。体格を無視した絶対値で動物(ヒトも含む)の跳躍大会を開くと、勝つのは誰だと思いますか？ 幅跳びはカンガルーの13m、高跳びはピューマの3.7mだそうです。そして、最も体長当たりの跳躍

距離の大きいのはノミであり、幅 200 倍、高さ 125 倍とのこと。体育の授業で走り幅跳び・高跳びが得意だった人も嫌いだった人も、「跳ぶ」をみる目がかわるかもしれません。

学校の先生になりたい人へ

特に学校の先生になりたい人は、体育・スポーツの好き嫌いや得手不得手にかかわりなく、どうぞこの文章を読み続けてください。実際の体育の授業では、以下のような指導者の型が存在しているようです。①「がんばろう！」しか言えない〔情意型〕、②「思いっきり！」「力いっぱい！」しか言えない〔力動型〕、③「先生は運動が苦手です」を連発する〔教材研究逃避型〕、④「できなくてもがんばることが大事だよ」を連発する〔達成－努力すり替え型〕、⑤自分ではできるための方法を持っていないのに、「どのようにすればいいのでしょうか？」という難しい問題を学習者に委ねてしまう〔方法論学習者委託型〕、⑥怒声や叱声で支配し、時には暴力も行使する〔恐怖政治型〕、⑦体力トレーニングばかりの〔体力至上主

義型〕、⑧技能ドリルばかりの〔ドリル至上主型〕、⑨お楽しみ会的なゲームばかり行う〔レクリエーション型〕、⑩自主性の育成あるいは支援と称して学習指導を組織しない〔放任型〕。

このような悪しき型から脱却し、体育を教育として成立させるために教師は何を考え、何をどう実践していけばいいのか？その指針を与えてくれる本として「体育科教育学の探究－体育授業づくりの基礎理論－」（1997 年、竹田清彦氏、高橋健夫氏ら編、大修館書店）をお勧めします。この本では、体育の目標、教科内容、教材、学習指導、教授スキル、評価などについて、歴史や諸外国の動向を踏まえた内容が明確に述べられています。この本と真剣に格闘すると、先生になりたい気持ちが高揚するか、それとも萎えるかのどちらかになるでしょう。「何を言っているの？」という人は、将来、10 の型のどれかに当てはまってしまうことになるかもしれません。

（そうくら・けい 共通教育第三部会長）

読むこと・学ぶこと・考えること

福井卓雄

図書館から、学生に読んで欲しい本というテーマで原稿を書いて欲しいと頼まれました。いろいろと考えましたが、次の二冊の本を紹介することにします。

- ・三木清：人生論ノート、新潮文庫
- ・リチャード・ドーキンス（日高敏隆他訳）：利己的な遺伝子、紀伊国屋書店

そのころは、「学生諸君に、まず、人

（人間）について学び、考えて欲しい」ということにあります。上の二冊はたった二つの例にしかすぎませんが、考えてみれば、「学ぶ」ということは、我々（人または人間）とそれを取り巻く世界について学ぶということにほかなりません。大学というところは、学ぶことの中心にあるわけですから、学ぶことの入門者である学生諸君には、まず人について学ぶことから始めて欲しい、というのが私の主旨です。

では、上の二冊について簡単に紹介しておきましょう。「人生論ノート」は高等学校の教科書でも取り上げられています。哲学者三木清が雑誌「文学界」に書いたものをまとめたものです。「死について」、「幸福について」…といった人生のテーマについて短い文章がまとめられています。私は大学二年生のときに読みました。その本は、当時の大学の近くの本屋のカバーがかかったまま、私の本棚にあります。たとえば、「怒について」の冒頭は次のようです（漢字と仮名づかいを現代のものに書きかえています）。

Ira Dei（神の怒）、キリスト教の文献を見るたびにつねに考えさせられるのはこれである。なんとという恐ろしい思想であろう、またなんとという深い思想であろう。

神の怒はいつ現れるのであるか、正義の蹂躪された時である。怒の神は正義の神である。

神の怒はいかに現れるのであるか、天変地異においてであるか、預言者の怒においてであるか、それとも大衆の怒においてであるか、神の怒を思え！

大学生の私が書かれたものの内容を理解していたかどうかは幾分疑問です。しかし、その当時の私が人生について考えたことと、読んだことのいくつかが長い間記憶にあったことは事実です。この年齢になるまでに腑に落ちるようになった事柄もいろいろあります。学ぶことには時間と繰り返しが必要です。

「利己的な遺伝子」は上とはまったくことになった本です。作者は生物学者で、著名な動物行動研究者です。さまざまな動物行動（人の行動もその一部です）の起源を遺伝子の自己保存性という観点から説明しようとした、きわめて大胆で面白い著作です。

この数年間に私が読んだ本の中では一番気に入っているものの一冊です。この本の内容を紹介するために、初版のまえがきの冒頭部を引用します。

この本はほぼサイエンス・フィクションのように読んでもらいたい。イマジネーションに訴えるように書かれているからである。けれどこの本は、サイエンス・フィクションではない。それは科学である。いささか陳腐かもしれないが、「小説よりも奇なり」ということばは、私が真実について感じていることをまさに正確に表現している。われわれは生存機械-遺伝子という名の利己的な分子を保存すべく盲目的にプログラムされたロボット機械なのだ。この真実に私はなおただ驚きつづけている。私は何年も前からこのことを知っていたが、到底それに完全になれてしまえそうにはない。私の願いの一つは、他の人たちを何とかして驚かせてみることである。

私自身もまた、驚かされ、夢中になってしまいました。学生諸君も是非驚かされてみてください。そして、自分と自分のまわりの人々の行動を観察し、真実がなんと奇妙で奥深いものであるかを体験してみてください。見ること、知ること、試すことが、科学することの第一歩でもあります。

私は意図的にまったくことなる分野の本二冊を選んでみました。一方は、人間の内部からの思索により生まれたものですし、他方は、科学的な観察と検証から生まれたものです。その生まれた時代も背景もちがいます。しかし、これらの本の間に、なぜか人の行動の認識に関する共通点の存在を感じるのには私だけでしょうか。これも私の驚きの一つです。

（ふくい・たくお 共通教育第四部会長）

考えてみよう日本国民における福沢諭吉

山 根 清 志

(1)

私がとりあえず学生諸君に読んで欲しいと思う本は、今さら何だと思われるかも知れなけれども、福沢諭吉の①『学問のすゝめ』、②『文明論之概略』、③『福翁自伝』の3冊である。少なくともどれか一冊、できれば3冊ともを、卒業するまでの4年間に読破して卒業して欲しい。いずれも岩波文庫(青帯)におさめられており、手にいれることは難しくない。

(2)

福沢諭吉の名前は、小学生以上であれば『学問のすゝめ』初編冒頭のあの有名な名文句とともにほとんど誰でも知っている。国民教育のそれなりの成果なのであろう。ところが、その福沢の思想体系の本質がどのようなものであり、総体としての福沢はどう評価されるべきなのだろうか、などといった話に共通教育等の授業で入っていくと学生諸君はもうお手上げである。聞いてみると、『学問のすゝめ』をはじめとして福沢のものを今まできちんと読んだ者がほとんどいないのである。それで、“福沢諭吉の思想体系はどんなものだったのだろうか？”などと問われれば、唯一知っている「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」という片言隻句から、帰納的に勝手に人権主義者福沢諭吉や民主主義者福沢諭吉が思い描かれたりすることになるのである。「と云へり」と伝聞調の表現をとっているのはどうしてかなどの問題はお構いなしである。畢竟、福沢ほど全国的に名は知られていながら、どういう人なのかは実は知られていないような人物は他に例がな

いではなかろうか。そしてその分だけ誤解された福沢像がまかり通っていると私は思う。因みにいえば、福沢の思想体系を民主主義だとは私は考えていない。

(3)

上述したような福沢理解にかかわる現状を見過ごせないと私が思うのは、今日おこなわれている3種の紙幣の中で最も高額の一万円札の肖像画に採用されている(そのこと自体になにがしかの国民教化上のねらいがある)ように、福沢諭吉は良くも悪くもかつて日本国民に圧倒的な影響を与えてきたし、今も与えている存在だと考えるからである。とりわけ重要な今への影響が福沢の実像にもとづいてのものであるならまだしも、誤解された虚像としての福沢像によってであるというのであればなおさら大きな問題であろう。

福沢諭吉に1885(明治18)年発表の『脱亜論』というのがある。弓削達氏の言葉を借りれば、それは、「日本の西洋化・近代化のためにアジアを邪魔者視し、アジア蔑視、日本の対アジア優越感をバネに、侵亜をいとわない議論であった」が、その結果として、「アジアを蔑視し、アジアを侵略し、それを足場に日本の西洋化、近代化をなしとげようという意識は、明治以来国民教育の基礎理念となり、……1945年以前に教育をうけた世代で、この意識に染まらなかった者は殆ど一人もいなかった筈である」(弓削達『明日への歴史学』)と言われる程までの影響力をもったのであった。そればかりではない。福沢は、日清戦争＝下関条約により日本が手にした台湾での島民等の反植

民地的蜂起に対し、「兵力を以て容赦なく掃蕩を行ひ、葉を枯らし根を絶ちて一切の醜類を殲滅」（「台湾の騒動」1896年）するよう激越な調子で政府を煽り立てたり、阿片戦争に関しては、清朝側当事者であった林則徐を智恵なしの短気者と評し、「今日に至るまで、世界中に英吉利を咎むる者はなくして、唯唐人を笑ふ許りなり。是れ全く唐人が世間見ずにて道理を押し立てることを知らざる己が不調法なれば、自業自得、誰に向て愚痴の述ぶべきやうもなし」（『唐人往来』1865年）と平然と言って憚るところがなかったのである。

（4）

上に紹介したいずれの側面も間違いなく福沢諭吉である。『学問のすゝめ』初編冒頭であの有名な名文句を述べた福沢諭吉なの

である。その名文句から福沢諭吉を民主主義者だの人権主義者だのと思ひ描きたいのは勝手だが、それだけでは信仰と同一レベルであって科学ではなかろう。一見して明らかに相矛盾する諸側面を内在させた福沢諭吉の思想体系は、一体どのように解釈・理解すれば最も説明しやすいのか。それには、総体としての福沢を見ようとすることが必要であろう。そのためには、まず福沢の書いたものがしっかりと読まなければならない。そして、自分の頭で福沢諭吉が何者であるのかを考えてみようではないか。その糸口にして欲しい。かれは肖像が一万円札に採用される程の「国民的思想家」なのだから。

（やまね・きよし 共通教育第五部会長）

『脱線読書案内』

林 捷

学生の頃「書を捨てて街に出よう」というスローガンが喧伝されたことがあった。かなり政治的な時代だったから、社会的なアンガージュマンの思想がその背景にあったのだろう。ことさら書に齧り付き、部屋に閉じこもるタイプではなかったが、そのスローガンにはどこことなく胡散臭さを感じ取っていた。街に出たところで面白くもなかった。部屋に寝そべって、勝手気ままに本を読んでいるほうが性に合っていた。

『学生に読んで欲しい本』を書いてくれとのことだが、好きな本を好き勝手に読めばいいじゃないか、というのが本音だ。自分がそうしてきたからだ。教師面して良書（？）を紹介しても、地べたに座り込み、毒にも薬にもならぬ漫画に現を抜かす茶髪

諸君の関心を引くことはないだろう（かつての『ガロ』やつげ義春の愛読者として、漫画の表現力を認めるのに吝かではないが）。しかし、なかには反時代的な学生もいるだろうから、そんな手合を仮想読者として、かなり偏頗な書籍紹介をしよう。似非文化人、似非学者のあぶくのように実質のない本が多すぎる（こういう夜郎自大ほど自分の著書を最高だと思いたがる）。それに対して、どの分野であれ古典として評価されている本は時の侵食に耐えてきただけあって紹介に値する。

新刊書をせっせと「飲み込んで」いた青年ヤノホは、その師カフカから「古典」を読むように注意される。グスタフ・ヤノホの『カフカとの対話』（筑摩叢書）は、それ

自身対話録として古典になりうる価値をもっているが、時代を洞察する孤独者カフカの面目が躍如としていて、実に面白い。しかし古典の紹介は授業でさんざん聞かされているだろうから、ここではやらない。最近読んで印象に残った本を挙げるにとどめる。

語学教師として何度読んでもそのつど興味を掻き立てられるのは米原万里の『不実な美女と貞淑な醜女』（徳間書店）だ。醜女はブスと読む。第一線で活躍するロシア語同時通訳者による出色の通訳・翻訳論であり、語学学習論である。豊富な、しばしばずっこけ気味の体験に裏打ちされているので、すこぶる説得力がある。同女史の清新な訳によるロンブ・カトー著『わたしの外国語学習法』（ちくま学芸文庫）も、16ヶ国語をものにしたこのハンガリー女性の博学多識と深い教養が披歴されて魅力的だ。ハウツーものを期待するむきは、肩透かしを食うだろう。音楽をほとんど快不快のレベルでしか聴かない私に、音楽の読み方とでもいうべきものを教えてくれたのは、喜多尾道冬著『音楽の悪魔』（音楽之友社）だ。デモニーニッシュな音楽の理念的考察として、音楽に関心のある学生には必読の書であろう。

伊藤光彦著『田舎に暮らして世界を視る』（平凡社）は一見軽いエッセイ集のようにみえるが、その達意の文章の行間からは一流ジャーナリストの研ぎすまされた鋭い眼光が放たれている。田舎とは福井のことだ

が、どのような事情か知らないが著者は福井を去った。視野の広い国際人を失った福井の損失は大きい。異文化・国際関係に関心のある諸君に読んで欲しい本だ。

学生に薦めるのを少しためられるが、筒井康隆著『天狗の落し文』（新潮社）は、文学的な着想の原初形態を感じさせ、常識を蹴散らして奔放にイメージを膨らませていく作家の想像力の恐ろしさを改めて思い知らされる。「全作、盗用自由！」とあるから、いくつか盗用して傑作コントをものにする変わり種の学生はいないものか。脱線気味の読書案内を軌道修正するために、かなり真面目な本を紹介して締めくくろう。

柄谷行人『倫理21』（平凡社）は、子供の犯罪に対して親の責任を問う日本の特殊性から論をおこして、戦争責任論、更には21世紀における倫理のあり方をカント哲学に依拠しつつ、誠実に思索を重ねた労作だ。学生諸君には間違いなく難物だろうが、これくらいの本に挑戦しようとする者が何人かはいてもいいはずだ。

以上、最近読んだ本を思いつくままに挙げてみたが、ジャンルを問わず共通する点は、作者の精神の飾り気のない単刀直入さ、ひろやかさである。本質・実質を追及する精神とはこのように剛毅なものなのだろう。

（はやし・しょう 共通教育第七部会長）

カナダ出張顛末記

木 村 幹 明

旅の始まり

私のカナダ出張は2001年7月24日の上木事務長の一言「木村さん、カナダへ行ってほしいんや」で始まった。ちょうどこの時図書館と総合情報処理センターの複合施設の概算要求をしようとしていたところであったので、この出張でトロント大学、ブリティッシュ・コロンビア大学、ビクトリア大学などカナダ有数の大学図書館が視察できるとあって喜んで受けることにした。

出張メンバーは、学長・F課長・Y補佐、それと私の4人である。学長以外に海外渡航経験のあるのはF課長だけである。それも本人の言葉を借りると10年ほど前にツアーの後ろにくっついていただけとのこと。このメンバーではあまりにも頼りない。何かあるといけないということで、外国1人旅が趣味である学長夫人が私費で同行されることになった。このことが後々どれだけ助けとなるか出発時点では夢にも思わなかった。

数回の打ち合わせや旅行の準備などであっという間に8月が過ぎ、いよいよ出発日の9月8日になった。エアー・カナダのボーイング747機に乗り込み、生まれて初めて日本を離れることになった。機中での私の席はF課長とY補佐に挟まれたエコノミー席で、長時間のフライト中ずっと窮屈な思いをしないといけないのかと思っていたところ、カナダ人スチュワーデスが、水平飛行に移ったら空いている席に移動しても良いということで、喜んで前の席に移動した。楽に飛行機の旅ができるのもうれしいが、

ネイティブの英語が理解できたことのほうがうれしかった。私の英語は独学のブロークンなものである。カウンターでは日本語の分からない非ネイティブの外国人教師や留学生相手に英語でやりとりはしているが、カナダで果たして通じるのか不安に思っていた。今度の出張では学長夫妻が通訳してくださることになってはいたが、ホテルの部屋に入った後などは通訳をお願いするのも気が引ける。水（ビールも）がほしい。ヘッドフォンが不良品であったので交換してもらうなど、機内英会話の練習（？）の結果、多少の自信を持つことができた。（確かに通じたが、かなりのブロークン・イングリッシュであり、学長夫人からは「強引な英語」と命名された。）

日付変更線をこえ、出発日と同じ9月8日の午前10時ごろバンクーバーへ到着した。ここで入国手続きを終え、トロント行きの飛行機の搭乗手続きをしようとすると、トロントまでのチケットの提示を求められた。しかし、関西空港で飛行機に乗ったとき、スチュワーデスがトロント行きの乗客も含めた全員のチケットを回収してしまっていたので、事情を説明し、なんとか飛行機に乗ることができた。このごたごたで出発が1時間遅れたがその後は何事もなく無事にトロントへ到着し、空港近くのホテルに一泊することになった。

息抜きの1日

翌9月9日は日曜日とあって丸1日観光となった。まず、世界三大瀑布の一つナイアガラの滝を見物した。観光船「霧の乙女

号」での滝つぼ遊覧やナイアガラ川が滝になだれ落ちる瞬間を見ることのできるテーブルロック、滝の裏側を探検するジャーニー・ビハインド・ザ・フォールズなど、ナイアガラを心ゆくまで満喫した。昼食後、ナイアガラを滝から車で 30～40 分のところにある Niagara on the Lake まで足をのびした。ここは 19 世紀のたたずまいを残している街で、中心のクイーン・ストリートにはビクトリア様式の住宅などが建ち並んでいる。ヨーロッパ系の人々の人気スポットで、東洋人はあまり訪れないとのことであったが、日本人らしき人を結構見かけた。自分のことは棚に上げ、日本人はどこへでも出かけていくものだと感じた。

トロント大学視察

9 月 10 日月曜日、いよいよ今日からカナダの大学図書館の実状を見ることができる。張り切ってトロント大学へ向かった。アポイントメントは午後なので、早出をして世界一の高層建造物 CN タワーを見学した。ここには床が地上まで透けて見えるガラス・フロアがあり、この上に乗るとまるで空中に浮いているようであった。

時間が迫ってきたので、昼食もそこそこにトロント大学へ向かった。トロント大学はカナダ最大の大学で、キャンパスはメインとなるセント・ジョージ、東のスカボロー、西のエリンデールの 3 ヶ所がある。セント・ジョージ・キャンパスは、トロント市街のほぼ中心に位置し、石造りの重厚なゴシック建築や近代的なビルが広大な敷地に立ち並んでいた。

我々は国際交流を担当する部局（？）の Katie Baldwin 嬢から大学の概要説明を受けた後、中央図書館である Robarts Library へ向かった。Robarts Library はカナダのシンボルである楓の葉をあらわした巨大な三角柱の形状をした建物である。トロント大学図書館は約 30 の図書館で構成

されており、1,300 万冊の蔵書、3,000 の閲覧座席を擁しているとのこと、ただただ圧倒される思いであった。

Carole Moore 館長からデジタル時代の図書館サービスやどのようなデジタル・コンテンツを提供しているかなどの説明を受け、館内ツアーではカナダにおける最先端の図書館サービスを目の当たりにすることができた。特に印象に残ったのは「Information Commons」という施設である。この施設は図書館の一部局ではなく、情報テクノロジーを利用するための環境やサービスを全学的規模で提供・サポートするものであり、サービス展開の拠点を学生や教職員が入りやすい Robarts Library の 1 階に置いている。



左から Y 補佐、筆者、Moore 館長、(1 人飛んで)、Baldwin 嬢、児嶋学長、F 課長

この後、児嶋学長と Robert J. Birgeneau トロント大学長、Sheldon Levy 副学長らとの会談、Ontario Institute for Studies in Education 内の Education Commons の見学ツアーと続いた。視察が終わった後は、トロント市中心街のホテルに宿泊し、夜はちょっと場違いなアメリカ南部料理に舌鼓をうった。

ヨーク大学視察とアメリカ同時多発テロ

9 月 11 日火曜日、この日はトロント市北西にあるヨーク大学の視察である。約束の時間は午前 9 時であったが、道に迷い予定

より 1 時間遅れでヨーク大学へ到着した。最初にヨーク大学のファシリティ・マネージメントについての説明を受けた。なんと、ヨーク大学では発電所を所有していて、学内の電力は自前でまかない、余剰電力は売却しているとのこと、余りの規模の大きさに一同驚いた。しかし、広大なキャンパスを持っているにもかかわらず施設面での最大の問題は駐車場の確保であるとのこと、意外な感を持った。

到着時間が遅れたことと、F 課長が実に熱心に質問をしたため図書館視察の時間がほとんどなくなってしまった。30 分弱の時間でヨーク大学図書館のサービス状況についての説明を受けただけで、図書館ツアーも省略となってしまったのは非常に残念であった。

この後、児嶋学長と Lorna Marsden ヨーク大学長らとの会談があった。ここで我々はアメリカの同時多発テロの発生を知らされた。しかし、この時はアメリカで起きたテロのためにカナダ国内の航空路線がすべてストップし、この後の予定が台無しになるとは夢にも考えていなかった。

目的を終え、この日は「Holiday Inn Toronto Airport East」というこの後 5 泊もすることになるホテルに宿泊した。

恐怖の「No problem」

9 月 12 日水曜日、同時多発テロの影響でアメリカとカナダの全飛行場が封鎖されたため、予定していたカルガリ大学視察は中止となった。資料によるとカルガリ大学にも Information Commons という施設があるとのこと、ヨーク大学図書館視察の時間が無かっただけに楽しみにしていたのだが、このような状況ではやむを得ない。

午前中にトロント空港へ様子を見に行っていたが、空港入り口前にはポリスカガードマンかわからないが厳重な警備をしている。話を聞くと今日は空港内へ立ち入りはでき

ないとのこと。あきらめてホテルへもどることにした。

午後、もう一度トロント空港へ様子を見に行くと封鎖が解かれていたので、空港内のエアー・カナダのチケット売り場へ行ったところ、バンクーバー行きの飛行機が予約できた。学長は係員に何度もこれで手続きはよいのかと確認すると、「手続きはこれで終了した。No problem」との答えが帰ってきたので、一同ほっと胸をなでおろした。

一日おいた 9 月 14 日金曜日、午前 7 時発のバンクーバー行きの飛行機に乗り、午後はブリティッシュ・コロンビア大学を視察する予定であった。トロント空港は早朝にもかかわらず大混雑であった。順番を待っていざ搭乗となったが係員の態度が何かおかしい。何度もこちらの事情を聞き、オフィスへ確認に行っている。最終的に「このチケットでは搭乗できない。事前にブッキングが必要である。」ということになった。我々は前々日のチケット予約のときにしつこいくらい確認したことを説明したが、気の毒だが搭乗できないの一点張りである。あのときの「No problem」はいったい何だったのか。この時からこの言葉は私にとってのタブーとなった。

やむを得ず、エアー・カナダのチケット・センターへ向かった。最初は 9 月 20 日まで便が無いとのことで、旅慣れた学長夫妻もさすがに困った様子であった。もちろん我々 3 人も困り果てた。しかし、チケット・センターのスタッフがいろいろ手を尽くしてくれた結果、なんとか 9 月 16 日の関西空港行きの便が予約できた。カナダでの予定は大幅に狂ってしまったが、帰りは予定どおりとなり一安心した。

ようやく帰国

さらに 1 日おいた 9 月 16 日の日曜日、7 時 15 分発の予定が厳重な手荷物チェックのために 1 時間遅れたものの、今度は無事

飛行機に乗り込み、長期滞在となったトロントを後にした。しかし、今度はバンクーバー空港に到着してびっくり、空港の寒い屋上駐車場に何千人という人が列をなして飛行機を待っている。予約してある関西空港行きの飛行機に乗れるのは間違いないが相当遅れるとのこと。やむを得ず寒い駐車場で延々6時間も待ち続け、15時30分ようやく日本に向かってバンクーバーを後にした。

なぜ、こんなにも飛行機が遅れたかというと、バンクーバーではトロント以上に厳しい手荷物検査が行われたためであった。日本時間の9月17日月曜日18時、ようやく関西空港にたどり着いた。Y補佐の「言葉が通じることはこんなにもいいことか、ようやく保護者抜きで行動ができる。」との言葉に一同大笑いをした。

これでカナダ出張顚末記は終わりとする。後半はこの出張で予定どおり視察できたトロント大学図書館の報告とする。

トロント大学視察報告

Robarts Library (中央図書館)

現在のようなネットワーク社会では、

- ・ 図書館が介在しなくても必要な情報を入手することができるが、図書館の機能や役割をどのように考えているかとの質問をしたところ、「図書館は大学のインフォメーションセンターとしてその役割を果たすことに存在意義がある」とともに、「学習環境の提供としての機能もある」と考えているとのことであった。
- ・ 図書館利用証は「TCard」と呼ばれていて、学生証や身分証明書証と一体化されている。TCardの発行と同時に電メール・アカウントも発行される。また、このカードにはICチップが埋め込まれており、入金可能なプリペイドカ

ードとしてコピー機、プリンター、大学内の自動販売機などに使用できる。

Information Commons

- ・ Robarts Libraryの1階には、カナダ4大銀行の一つであるScotiabankが出資した「Scotiabank Information Commons」という情報スペースがあり、パソコン、プリンター、スキャナなどが開放されている。Information Commonsは以前からあったが、Scotiabankからの200万カナダドルの寄付金で70席を増設、以前からあった70席も設備更新した。



Scotiabank Information Commons

- ・ 図書館内に Information Commons が設けられた理由としては、図書館が大学における情報提供の中心的役割を担うことが重要である大学当局が認めたことと、Information Commons のスタッフが図書館の優れた利用者サービスや電子情報の組織化の知識を習得するのに適していると考えられたことによるとのこと。
- ・ 端末は電子メールや WWW などのインターネットサービスや図書館などが提供するデータベースを利用するために開放されており、キャンパス外からのリモートアクセスにも対応している（同時アクセス 60 とのこと）。

- ・ 端末エリアの近くにヘルプデスクが設けられており、コンピュータ関連の質問に対処している。また、ヘルプデスクでは、個人所有のコンピュータ用に必要なソフトウェアを収納したCD-ROMをスターター・パッケージとして無料で配布している。
- ・ 上記のほかにデジタル・コンテンツを作成する部屋、機器が用意されている。

図書館提供のデジタル・コンテンツ

- ・ 最初は約 200 タイトルからスタートした電子ジャーナル・サービスであるが、現在は約 13,000 タイトルを大学構成員にたいして無料で提供している。(紙より 2~3 週間速報性がある)
- ・ 最初はそれほど利用が無かったが、より多くのタイトルを提供したところ利用が増加していった。
- ・ 日本の国立大学図書館は、資料購入についての予算の実権を持っていないところが多く、電子ジャーナルの購入がなかなか進まないと言う私の説明に対し、Moore 館長からネットワーク資源・予算ともに集中化することにより有効な活用が出来る。トロント大学でも議論を重ねることによって実現した。小規模大学のほうが意見の集約がしやすいとのアドバイスがあった。

(きむら・もとあき 情報サービス係長)

カウンターでの風景

柳 下 裕 美

<文献を探す>

利用者：文献を探しているのですが。

図書館員：どういう分野（テーマ）の文献をお探しですか。本学では、無料で情報検索できるデータベースを提供しています。化学分野は Chemical Abstracts の CD-ROM 版である CA on CD、科学技術分野は科学技術文献速報 CD-ROM、人文・社会・自然の全分野は雑誌記事索引(NACSIS-IR)を利用してください。理・工・農・医・人文系の外国雑誌約 14000 タイトルの目次情報を検索できる外国雑誌目次データベース検索システムもあります。その他、インターネットで検索できる無料データベースとして、教育学分野の E R I C、医学分野の P u b M e d があります。これらを使って必要な文献を探してみましょう。

- ・ **Chemical Abstracts**（ケミカルアブストラクツ 通称ケミアブ）
化学文献を検索するのに欠かせないツールで、雑誌論文だけでなく特許情報等も含まれている抄録誌。
- ・ **科学技術文献速報**（通称かぶんそく）
国内外の主要な科学技術資料を収集し、日本語の抄録を付与した総合抄録誌（全 11 シリーズ）。
- ・ **雑誌記事索引**（通称ざっさく）
我が国の学術雑誌に掲載された記事（論文）に関する書誌情報を収録したデータベースで、日本語の論文を探す際の基本的なツール。
- ・ **E R I C**（エリック） <http://ericir.syr.edu/Eric/>

- ・ **PubMed** (パブメド) <http://www4.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/>

<文献の所在を探す>

利用者：読みたい文献が見つかったのですが、これはどこにあるのでしょうか。

図書館員：まず、OPAC (オンライン目録) を使って、本学にあるか調べてみましょう。
検索できる資料は、開架図書・参考図書・1987年4月以降に受け入れた図書・遡及入力された書庫の図書及び製本雑誌・1999年以降に受け入れた未製本雑誌です。1987年3月以前に受け入れた図書については、目録カード検索システムを使って調べてください。

- ・ **福井大学附属図書館ホームページ** <http://karin30.flb.fukui-u.ac.jp/>
- ・ **OPAC (オーパック)** <http://karin20.flb.fukui-u.ac.jp/>
- ・ **目録カード検索システム** <http://karin30.flb.fukui-u.ac.jp/~work/mokuroku-card.html>

<文献を取り寄せる>

利用者：本学にない文献はどうしたら手に入りますか。

図書館員：他機関から有料で取り寄せることができます。Webcatに所蔵がある場合は、ILL (Inter-Library Loan：図書館間相互貸借) システムで申し込んで、約1週間で届きます。お急ぎの場合は、FAXまたは速達指定も可能です。また、文献画像伝送システム (DDS) が導入されましたので、稼動している機関に対しては申込みことができます。Webcatに所蔵がない場合は、国会図書館、BLDSC (英国図書館)、JST (科学技術振興事業団) に申し込むことができます。

- ・ **Webcat (ウェブキャット)**

国立情報学研究所が提供している、どのような図書・雑誌がどの図書館にあるかという目録所在情報をWWWで一般に公開するサービス。

<http://webcat.nii.ac.jp/>

- ・ **ILLシステム (アイエルエルシステム)**

国立情報学研究所が提供している、図書館間での文献複写・相互貸借の手続きをオンラインで行うシステム。前述の目録所在情報を利用している。

費用：国立の機関は1枚35円＋郵送料。それ以外は各機関の指定料金による。

- ・ **文献画像伝送システム**

文献をスキャンした画像データを、インターネット上で送受信するシステム。利用者にはプリントアウトして提供される。

<図書を取り寄せる>

利用者：本学にない図書を借りることはできますか。

図書館員：はい、相互貸借といいまして、他機関から借りることができます。費用は往復の郵送料 (約1200～1500円) を負担していただきます。

- ・ **相互貸借**

現物貸借ともいう。借用期間は各機関の指定期間で、通常2週間から1ヶ月 (郵送期間を含む)。

<電子ジャーナル>

利用者：電子ジャーナルって何ですか？

図書館員：電子化された雑誌のことで、インターネット (WWW) 上でみることができま

す。本学でも、「利用可能な電子ジャーナル」を図書館のホームページで紹介しています。

・ **利用可能な電子ジャーナル** <http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp/densij.html>

<お気に入り>

インターネット学術情報インデックス(東大) http://resource.lib.u-tokyo.ac.jp/iri/url_search.cgi

理工学系ネットワークリソース(東工大) http://tdl.libra.titech.ac.jp/dlib2/resource_top25_list.html

アリアドネ：人文リソース集 <http://ariadne.ne.jp/>

ブックコンテンツ・データベース(東大) <http://contents.lib.u-tokyo.ac.jp/contents/top.html>

電子ジャーナリスト(北大) http://ambitious.lib.hokudai.ac.jp/online_journal/

アブストラクトデータベース(函館高専) <http://www.hakodate-ct.ac.jp/~w-gakujo/tosyo/abstHOMe.htm>

略語集：全分野 <http://www.public.iastate.edu/~CYBERSTACKS/JAS.htm>

：化学 <http://www.library.ubc.ca/scieng/coden.html#I>

参照文献の書き方 http://www.jst.go.jp/SIST/sist02/sist02_m.htm

J I S 検索 <http://www.jsa.or.jp/catalog/catalog.asp>

特許検索 <http://www.ipdl.jpo.go.jp/homepg.ipdl>

学習指導要領 http://www.mext.go.jp/b_menu/kensaku/index.htm

< I L L 担当者のひとりごと >

私が担当している文献複写や相互貸借業務は、I L L システムが導入されてから短期間で文献や図書が入手できるようになったため、利用者からの申込み件数が年々増加しており、それに伴い I L L 担当者の業務量も増えています。ここ近年は、雑誌価格の高騰により購入を中止し代わりに文献を申し込むケースや遡及入力した図書に対して他機関から貸出申込みがあるケースが増えており、更にこの現状に拍車をかけています。

しかしながら、各機関の処理スピードはさほど落ちておらず、タイミングが良ければ申し込んだ翌日に文献が届いて利用者に驚かれたこともあり、各機関の I L L 担当者のがんばりに感謝している次第です。本学でも、他大学への申込みはなるべくその日の内に済ませ、他大学からの申込みに対しては 1 ~ 2 日中に発送できるよう心掛けています。ただ、研究室等の資料については複写できず断ることもあります。限られた時間内でキャンパス内の資料を複写しようと思うと、冗談抜きで走り回ることも少なくありません。また、利用者から至急入手したいといわれて、先方の担当者に電話で直接お願いすることもあります。そこはお互い様ということで快く送ってくださる大学がほとんどで、こんな時はやはり人的ネットワークが一番と実感しています。でも、なるべく余裕をもって申し込んでほしい・・・

<最後に>

執筆依頼があったものの、何を書いていいやら思い浮かばないため、カウンターでよくある質問を紹介してみました。少しでも参考になれば幸いです。

図書館に行かなくてもネットワークを介して多くの情報を入手できる環境づくりは利用者にとって有用であり、是非実現しなければならないと思っています。

他方、そういう環境が実現しても図書館に行って相談すれば問題が解決できる、より役立つ情報が手に入るといわれるような図書館も目指していきたいと思っています。

まずは気軽に声をかけてください。(やぎした・ひろみ 情報サ・ビス係)

お知らせ

目録カードがネットワークから検索できます

このたび、目録カードがネットワークから検索できる『目録カード検索システム』を公開しましたので紹介いたします。

このシステムは、図書館で所有している約 24 万冊の目録カードをイメージのままコンピュータに画像として取り込み、ネットワーク経由で一枚一枚手で引くように検索できるシステムです。

このシステムで利用できる目録カードは、第一期目録カード（1978 年 3 月以前受入図書）の「書名目録」と第二期目録カード（1978 年 4 月～1987 年 3 月受入図書）の著者・書名・件名が 1 つになった「辞書体目録」です。

1987 年 4 月以降の資料については、目録カードはなく、OPAC（福井大学附属図書館蔵書検索システム）で検索してください。

このシステムを構築するにあたりましては、九州大学附属図書館 南俊朗先生（現 九州情報大学教授）の多大なご支援を受け、公開するに至っております。

アクセス

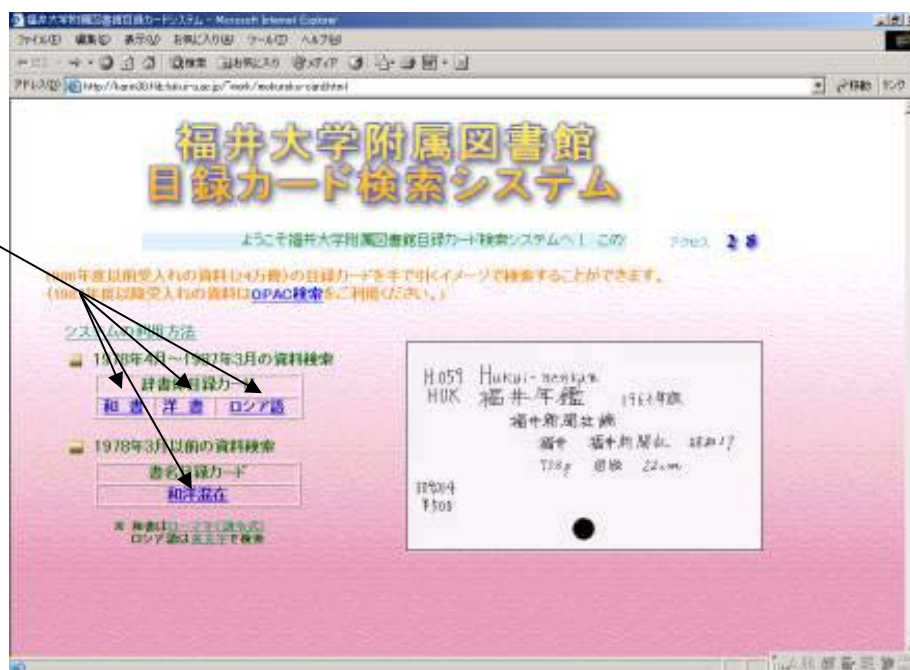
「福井大学附属図書館ホームページ」（<http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp>）の「福井大学の図書・雑誌を探す」へ進み「カードによる蔵書検索」を選んでください。このシステムに直接アクセスするには、

「<http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp/~work/mokuroku-card.html>」を入力します。

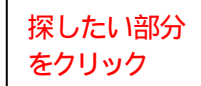
検索手順

トップページの「1978 年 4 月～1987 年 3 月の資料検索」の下にある「和書」、「洋書」、「ロシア語」、「1978 年 3 月以前の資料検索」の下にある「和洋混在」の 4 項目から目的の項目を選択（クリック）します。

探したい資料を 4
つの項目から選択



探したい見出しをクリック



The screenshot shows a web browser window with a presentation slide. The browser's address bar displays the URL 'http://www.ia-nokai.com/'. The slide content includes the title 'イアノカイ' (Iyanokai) and a large black circle. The browser's left sidebar shows a list of slides, with the current slide highlighted.

選択されたカード 10 枚が右側に表示されます。

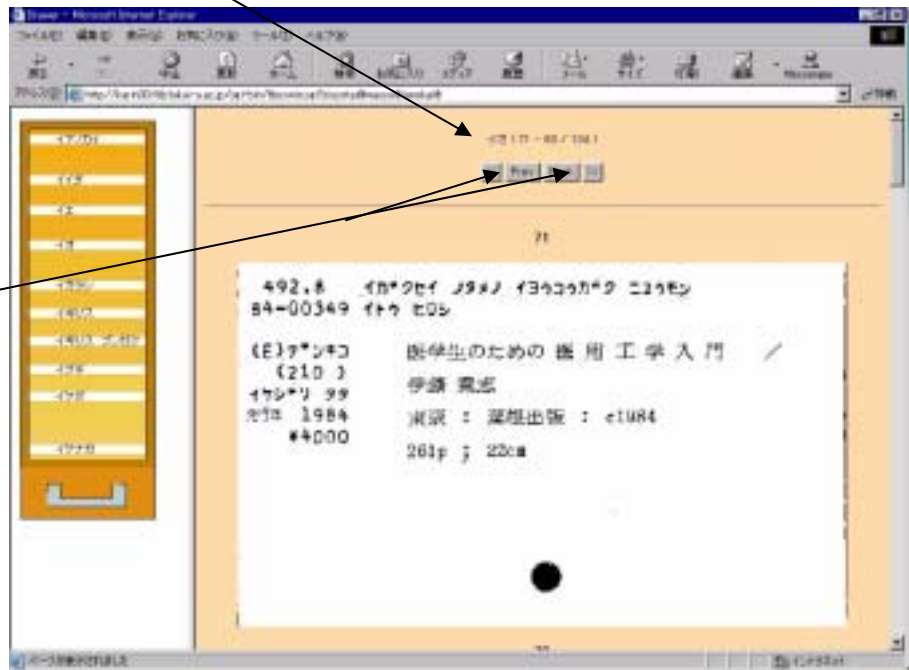
「<<」「Prev」「Next」「>>」のボタンをクリックして目的のカードを探します。

「Prev」「Next」 → 前後 10 枚のカード移動が可能

「>>」「<<」 → 前後 20 枚のカード移動が可能

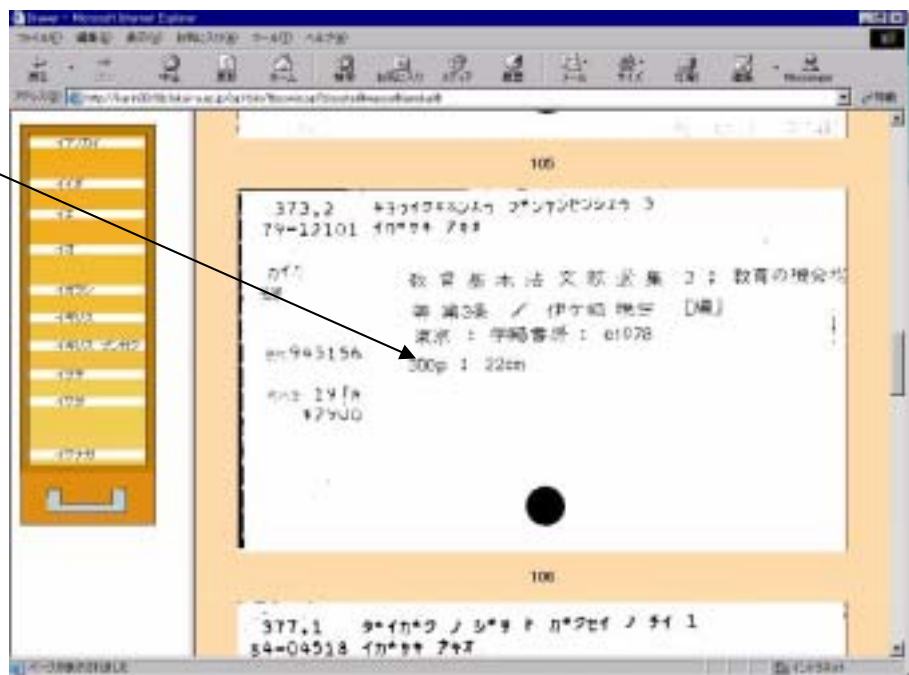
イオ (71-80/134) は、仕切り見出し『イオ』のカードが 134 枚であり、その内の 71 枚から 80 枚までを表示していることを表しています。

“Next”, “Prev”
等ボタンで移動



表示されたカードで表示に不鮮明な部分あった場合など、そのカードを拡大表示することができます。カードの部分（どの部分でも構いません）をクリック。

拡大したいカード
をクリック



新たなウィンドウが開き選択したカードが拡大表示されます。

電子ジャーナルにアクセスしよう!!

- 有料電子ジャーナルの導入 -

電子ジャーナルとは、インターネットを通して、学術雑誌の本文が直接読めるもので、図書館に出向かなくても学内ネットワークに接続されたパソコン等から簡単に利用することができます。また、海外の学術雑誌は到着の遅れや欠号などにより、論文が読めないことがありましたが、電子ジャーナルはその心配がありません。

本学では昨年度まで無料の電子ジャーナルしか利用できませんでしたが、平成 14 年度におきましては、試行的な導入を行うための予算処置がとられ、有料電子ジャーナルを大幅に導入することになりました。ぜひアクセスしてみてください。

利用できる電子ジャーナルタイトル数

- Elsevier 社 (Science Direct 21) 約 850 タイトル
- Springer 社 約 430 タイトル
- Blackwell 社 (SSH コレクション[人文・社会系分野]) ... 約 260 タイトル
(STM コレクション[自然科学系分野]) 約 330 タイトル

以上 1900 タイトルに近い電子ジャーナルが利用可能となっています。

アクセス及びタイトル内訳は次をご覧ください。

「福井大学附属図書館ホームページ」(<http://karin30.flib.fukui-u.ac.jp>) の「利用可能な電子ジャーナル」を選んでください。

海外衛星放送を見よう!!

図書館において、中国やヨーロッパなど 26 チャンネルの海外放送が見られる海外衛星放送システムが導入されました。世界各国の最新情報や留学生等の母国情報を得ることができ、また語学学習に役立てることも期待できます。

グループで見るのなら視聴覚室 (1 階)、一人で見るのならマルチメディア・コーナー (2 階) をご利用ください。

視聴可能なチャンネル一覧

河南電視台 (中国)	陝西電視台 (中国)	RTPi (ポルトガル)
青海電視台 (中国)	江蘇電視台 (中国)	内蒙古人民廣播電台(モンゴル)
江西電視台 (中国)	湖北電視台 (中国)	Dubai business Channel
遼寧電視台 (中国)	吉林電視台 (中国)	Muslim TV Ahmadiyya
内蒙古人民廣播電台(中国)	TV5 (フランス)	Saudi Channel 1
広東電視台 (中国)	Fashion TV (フランス)	Dubai EDTV
湖南電視台 (中国)	Deutsche Welle TV (ドイツ)	Dubai Sports Channel
湖北電視台 (中国)	RAI International (イタリア)	Kuwait Space Channel
FSTV 財經頻道 (中国)	TVE (スペイン)	

遡及入力実績報告

平成9年度から係内で始めた遡及入力も今年度末で5年が経過いたします。附属図書館の書庫内図書のうち、社会科学分野・歴史分野と文学分野の一部（日本文学・中国文学）を終了し、現在英米文学の入力をおこなっています。また、製本雑誌の入力は平成13年度で終了しました。

平成14年1月31日現在

	図 書	製本雑誌	合 計	備 考
平成9年度	11,459		11,459	整理係(現図書情報係)で入力開始
平成10年度	10,409		10,409	
平成11年度	13,322	10,538	23,860	遡及入力5ヶ年計画実施
平成12年度	13,144	28,567	41,711	
平成13年度	12,045	23,083	33,875	
合 計	60,379	62,188	122,567	

(*平成11年7月から遡及入力5ヶ年計画により4時間パート2名採用)

先人達が集め残し蓄積された資料を、利用者に知ってもらい、有効に利用してもらうことは非常に大切なことです。そして、電子図書館の基盤整備のためにも、これらの情報を遡及入力し、電子的検索を可能にすることは図書館にとっても大変重要な事と考えています。

今後も精度の高い書誌情報をも含めた図書館所蔵情報全体の電子化をめざすべく、鋭意努力してまいります。

本学教官著作等寄贈図書の案内

本学教官より下記の図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

なお、このように著作物を刊行された節には、一部ご寄贈くださいますようお願いいたします。

寄贈者	書 名	編著者	出版社	出版年
大下邦幸 (言語教育講座)	コミュニケーション・クラスの理論と実践	大下邦幸編著	東京書籍	2001.6
岡島昭浩 (言語教育講座)	元禄文学を学ぶ人のために	岡島昭浩他執筆 井上敏幸他編	世界思想社	2001.4
陳東輝 (異文化交流講座)	阮元与小学	陳東輝著	中国文聯出版社	1999.12

全国共同利用図書（大型コレクション） 及び自然科学系特別図書の案内

下記大学から、全国共同利用図書（大型コレクション）及び自然科学系特別図書の利用案内がありましたので、お知らせします。

資料の利用等につきましては、情報サービス係（内線2276，2277）までお問い合わせください。

（平成13年3月～平成14年2月受付分）

大 学 名	資 料 名
神 戸 大 学	「アジア各国法律コレクション Asian Law - microfiche collection - IDC / Netherlands」 内容：アジア法関係の貴重書文献を包括的に集成した資料集成で、1850年から1945年までの期間に刊行されたモンゴル法、オランダ領インド法に関する法律集、研究書に加え、Marquis de Olibart編集のアジア法関連書誌を底本として、他のアジア諸国の公法、私法に関する様々な文献をマイクロフィッシュにて集成している。

なお、利用案内はまだありませんが、採択されたものを紹介します。

大 学 名	資 料 名
富 山 大 学	「朝鮮開化期大衆小説原本コレクション」
滋 賀 医 科 大 学	「The Library of Medical History」 （医学の歴史 - 古典文献集成）
大 阪 教 育 大 学	「WHO（World Health Organization）刊行文献コレクション」
図 書 館 情 報 大 学	「Doctoral dissertation in library and information Science 1995-1998」 （図書館情報学関係学位論文集成）
東 京 大 学	「British Documents on Foreign Affairs : Reports and Papers from the Foreign Office Confidential Print , parts 1&2」 （英国外務省機密外交資料）
新 潟 大 学	「明清善本小説叢刊 初編・続編」
京 都 大 学	「Documents on education in Germany during the period from about 1680 to 1870」 （17-19世紀ドイツ教育学文献コレクション）
大 阪 大 学	「Kollektion von Offentliches Rechts in Deuthshland」 （ドイツ公法コレクション）
九 州 大 学	「The Urban Environment in Great Britain from 1719」 （英国社会と都市環境）
琉 球 大 学	「マイクロ版アジア各国経済・社会研究資料集成」

吉村基金による図書購入リスト

資 料 名	著 者 名	発 行 所
写真集成日本の近代化遺産（全 3 巻）	増田彰久編著	日本図書センター
ビデオテープ 自然・環境 21：生きものたちが告げる環境破壊（全 32 巻）	プロジェクトチーム企画・制作	販売：平成出版
講座人間と環境（全 12 巻）	福井勝義，秋道智彌，田中耕司企画編集	昭和堂
海のアジア（全 6 巻）	尾本恵市 [ほか] 編集委員	岩波書店
シリーズ・20 世紀の記憶（全 21 巻）		毎日新聞社
VISIBLE 宇宙大全	藤井旭著	作品社
動物世界遺産：レッド・データ・アニマルズ（全 8 巻＋別巻 1）	小原秀雄 [ほか] 編著	講談社
しくみ発見博物館（全 12 巻）	鳥海光弘監修	丸善

吉村基金：1985（昭和 60）年入学直後に亡くなられた吉村直樹さんのご遺族からの芳志金により設立されたものです。

2001年電気・通信普及財団寄贈図書一覧表

図 書 文 献 名	著 者 等	発 行 所
1 Javaプログラミング入門：実例・演習で身につける	林正幸著	共立出版
2 教養のコンピュータサイエンス情報科学入門（第2版）	小館香椎子, 上川井良太郎, 中村克彦共著	丸善
3 情報科教育法	大岩元 [ほか] 共著	オーム社
4 ニュー・パラダイム編（インターネット時代の教育情報工学 1）	生田孝至 [ほか] 共著	森北出版
5 ニュー・テクノロジー編（インターネット時代の教育情報工学 2）	稲葉晶子 [ほか] 共著	森北出版
6 Java言語を始めよう（Java言語プログラミングレッスン 上）	結城浩著	ソフトバンク
7 オブジェクト指向を始めよう（Java言語プログラミングレッスン）	結城浩著	ソフトバンク
8 標準Javaプログラミングブック（New Languageシリーズ）	河西朝雄著	技術評論社
9 デザイン情報学入門	和歌山大学システム工学部デザイン情報学科著	日本規格協会
10 最新パソコン用語事典 2001-'02年版	岡本茂 [ほか] 著	技術評論社
11 オペレーティングシステム	大久保英嗣編著	オーム社
12 データベース（新世代工学シリーズ）	西尾章治郎, 上林弥彦, 植村俊亮共編	オーム社
13 エンサイクロペディア情報処理 2000/2001	情報処理学会編	オーム社
14 コンピュータネットワークと情報（情報がひろく新しい世界 1）	久野靖著	共立出版
15 情報の表現と伝達（情報がひろく新しい世界 2）	水島賢太郎著	共立出版
16 情報化社会と情報倫理（情報がひろく新しい世界 3）	辰己丈夫著	共立出版
17 情報通信ネットワークとLAN（情報がひろく新しい世界 4）	長坂康史著	共立出版
18 社会基盤としての情報通信（情報がひろく新しい世界 5）	小檜山賢二, 栗原聡著	共立出版
19 ファジィとソフトコンピューティングハンドブック	日本ファジィ学会編集	共立出版
20 絵ときプログラマとSEの適性検査	三重野博司編著	オーム社
21 UNIXコマンド例文事典 csh/tcsh編	officeMASA著	技術評論社
22 UNIXコマンド例文事典 sh/bash編	officeMASA著	技術評論社
23 Linux管理トラブル解決Q&A	Brian Ward著	オーム社
24 OpenSSLによるSSLサーバの構築：暗号技術とSSL	永田弘康著	エーアイ出版
25 基礎・解析・確率編（グラフィカル数学ハンドブック 1）	小林道正著	朝倉書店
26 ロボットは心を持つか：サイバー意識論序説	喜多村直著	共立出版
27 爆発するインターネット：過去・現在・未来を読む	安田浩, 情報処理学会編	オーム社
28 第三の社会：ビジネス・家族・社会が変わる（叢書インターネット社会）	奥野卓司著	岩波書店
29 市民力としてのインターネット（叢書インターネット社会）	牧野二郎著	岩波書店
30 呼吸するネットワーク（叢書インターネット社会）	竹村真一著	岩波書店
31 インターネットと宗教：カルト・原理主義・サイバー宗教の現在（叢書インターネット社会）	土佐昌樹著	岩波書店
32 消えゆくコンピュータ（叢書インターネット社会）	久保田晃弘著	岩波書店
33 デジタル・メディア社会（叢書インターネット社会）	永越伸著	岩波書店
34 IT2001：なにが問題か	林統一郎, 牧野二郎, 村井純監修	岩波書店
35 インターネット訴訟2000：頻発するネット紛争の危機にどう備える	岡村久道編著	ソフトバンク
36 文化としてのIT革命	山崎正和, 西垣通編	晶文社
37 考える「もの」たち：MITメディア・ラボが描く未来	ニール・ガーシェンフェルド著	毎日新聞社
38 思考する機械コンピュータ（サイエンス・マスターズ）	ダニエル・ヒリス著	草思社
39 UNIXの1/4世紀（ASCII books）	Peter H. Salus著	アスキー
40 レーザーはこうして生まれた	C.H.タウンズ [著]	岩波書店
41 ダイソン博士の太陽・ゲノム・インターネット：未来社会と科学技術大予測	フリーマン・J. ダイソン著	共立出版
42 多様化世界：生命と技術と政治 新装	フリーマン・ダイソン [著]；鎮目	みすず書房
43 電子メディアは研究を変えるのか	倉田敬子編	勁草書房
44 絵でわかる通信回線のしくみ：文系でもわかる！	藤沢太郎文；松木ひろし絵	オーエス出版
45 科学技術の英語：IT時代の英語の読み方・書き方	篠田義明編著	早稲田大学出版部
46 OPCアプリケーション入門：IT時代の計測・制御システムの構築へ	日本OPC協議会編著	日刊工業新聞
47 IT時代のオールラウンドビジネス英語	篠田義明著	南雲堂
48 IT入門：パソコンとインターネットの基礎講座	田上博司著	二瓶社
49 モバイル・グローバル通信：移動通信開発の国際戦略と展望	羽鳥光俊, 服部武, 中嶋信生編著	コロナ社
50 情報通信ネットワーク	遠藤靖典著	コロナ社
51 スペクトラム拡散通信：高性能デジタル通信方式に向けて	山内雪路著	東京電機大学出版局
52 近代日本と物理実験機器：京都大学所蔵明治・大正期物理実験	永平幸雄, 川合葉子編著	京都大学学術出版会
53 詳解UNIXプログラミング 新装版	W. リチャード・スティーヴンス著	ピアソン・エデュケーション
54 TCP/IP解析とソケットプログラミング	澤川渡, 網島明浩共著	オーム社
55 基礎からわかるTCP/IPネットワークツール活用	井口信和著	オーム社
56 sendmailシステム管理	Bryan Costales, Eric Allman共著	オライリー・ジャパン
57 マスタリングTCP/IP IPマルチキャスト編	竹下隆史, 荒井透, 荻田幸雄共著	オーム社
58 暗号と代数プログラミング（プラタンBOOKS）	澤田秀樹著	海文堂出版
59 暗号理論と代数学（プラタンBOOKS）	澤田秀樹著	海文堂出版
60 マルチメディアセキュリティ（マルチメディア解説シリーズ 2）	田中初一著	昭晃堂
61 遺伝的アルゴリズム 4	北野宏明編	産業図書
62 エージェントテクノロジー最前線	長尾確編著	共立出版
63 知的制御システム：制御とオペレーションのための知識情報処理	竹垣盛一, 石岡卓也共著	海文堂出版
64 人工生命（電子情報通信大系シリーズ）	有田隆也著	科学技術出版
65 e-コマースシステム技術大系		フジテクノシステム
66 電気回路：大学課程 1 第3版	大野克郎, 西哲生共著	オーム社
67 電気回路：大学課程 2 第3版	大野克郎, 西哲生共著	オーム社

68	光・電磁波工学（新世代工学シリーズ）	西原浩編著	オーム社
69	デジタル情報学概論：21世紀、IT社会理解のために	奥川峻史、桜井哲真著	共立出版
70	意識の認知科学：心の神経基盤（認知科学の探究）	芋阪直行編著	共立出版
71	入門UNIX 改訂新版（アスキー・ラーニングシステム）	羽山博著	アスキー
72	デジタル信号処理：MATLAB対応	樋口龍雄、川又政征共著	昭晃堂
73	インテリジェントシステム：適応・学習・進化システムと計算機知能	福田敏男編著	昭晃堂
74	新電波法要説 第5版		電気通信振興会
75	パワーレーザの技術	中井貞雄編著	オーム社
76	やさしい細胞の科学	室伏きみ子、小林哲幸共著	オーム社
77	構成と制御（電子情報通信学会大学シリーズ H-4 電子計算機 2）改訂版	飯塚肇執筆	コロナ社
78	計算機システム	小高知宏著	森北出版
79	インターネット法律相談（ASCII books）改訂版	第一東京弁護士会総合法律研究所著	アスキー
80	情報の基礎離散数学：演習を中心とした	小倉久和著	近代科学社
81	アナログ電子回路	大類重範著	日本理工出版会
82	計算機工学概論	奥川峻史、柳瀬龍郎著	朝倉書店
83	パターン情報処理の基礎（情報科学こんせぶつ 9）	鳥脇純一郎著	朝倉書店
84	電磁理論演習（電子情報通信学会大学シリーズ演習 6）	熊谷信昭、塩澤俊之著	コロナ社
85	TCP/IPで学ぶコンピュータネットワークの応用	小高知宏著	森北出版
86	定本Cプログラマのためのアルゴリズムとデータ構造	近藤嘉雪著	ソフトバンク
87	入門UNIXオペレーティングシステム	Jerry Peek, Grace Todino, John Strang共著	オライリー・ジャパン
88	パワーエレクトロニクス入門 改訂3版	大野榮一編著	オーム社
89	信号システム理論の基礎	前田肇著	コロナ社
90	現代暗号（シリーズ/情報科学の数学）	岡本龍明、山本博資著	産業図書
91	離散数学：コンピュータサイエンスの基礎数学（マグロウヒル大学演習）	Seymour Lipschutz著	オーム社
92	電気機器：大学課程 2 改訂2版	仁田工吉 [ほか] 編著	オーム社
93	よくわかる通信工学	植松友彦著	オーム社
94	グラフィック認知心理学	森敏昭、井上毅、松井孝雄共著	サイエンス社
95	Octave/Matlabで見るシステム制御	浪花智英著	科学技術出版
96	Communication systems engineering	John G. Proakis著	Prentice Hall
97	Semiconductor physics : an introduction	Karlheinz Seeger	Springer
98	Fiber optics and nonlinear optics 2nd.		McGraw-Hill
99	全国試験研究機関名鑑 2002-2003	全国科学技術団体総連合編集委員会編	ラテイス（発売：丸善）
100	略語大辞典 2版	加藤大典編著、山崎昶増補改訂責任	オーム社

2002 年新規購入・中止雑誌リスト

2002 年新規購入雑誌

洋雑誌

誌 名	所 在
BSD MAGAZINE	知能システム工学
NETWORK MAGAZINE	総合情報処理センター
SOFTWARE DESIGN	情報・メディア工学
からだの科学	生活科学教育
環境社会学研究	地域環境
芸術新潮	芸術・保健体育教育
月刊ミューゼ	生涯学習
言語研究	言語教育
国語学	言語教育
進路指導	教務課
数理科学	知能システム工学
すくすくネット - ワ - ク	生活科学教育
造景	地域共同研究センター
テレパル	芸術・保健体育教育
図書新聞	異文化交流
日経サイエンス	電機・電子工学科
日経マイクロデバイス	情報・メディア工学
人間と環境	地域環境
ベビ・エイジ	生活科学教育
保健の科学	生活科学教育
マタニティ	生活科学教育
ミュージアム・マガジン・ドーム	生涯学習

和雑誌

誌 名	所 在
AMBIO	地域環境
APPLIED PSYCHOLINGUISTICS	言語教育
ARTIFICIAL LIFE	知能システム工学
ENGINEERING FRACTURE MECHANICS	機械工学科
GAZETTE DES BEAUX-ARTS	異文化交流
HUMAN ECOLOGY	地域環境
LANGUAGE AWARENESS	言語教育
LANGUAGE TEACHING RESEARCH	言語教育
NOMADIC PEOPLES N.S.	地域環境
RESEARCH QUARTERLY FOR EXERCISE AND SPORT	芸術・保健体育教育
SYSTEM	言語教育

2002 年購入中止雑誌

洋雑誌

誌 名	所 在
AMERICAN PSYCHOLOGIST	発達科学
ART & DESIGN ← ART & CRAFT DESIGN TECHNOLOGY	芸術・保健体育教育
ART EDUCATION	芸術・保健体育教育
BIBLIOGRAPHY OF ASIAN STUDIES	社会系教育
BIOLOGICAL PSYCHOLOGY	生涯学習
BUILDING SERVICES JOURNAL	建築建設工学科
BUSINESS WEEK	異文化交流
CA SELECTS PLUS: HIGH PERFORMANCE LIQUID CHROMATOGRAPHY	生物応用科学
CANADIAN GEOGRAPHER	社会系教育
CHILD DEVELOPMENT	発達科学
COGNITION AND INSTRUCTION	発達科学
COMMUNICATIONS IN PARTIAL DIFFERENTIAL EQUATIONS	理数教育

COMPUTERS AND FLUIDS	機械工学科
CONTEMPORARY PSYCHOLOGY	発達科学
CRITIQUE	異文化交流
CURRENT GEOGRAPHICAL PUBLICATIONS	社会系教育
DAIDALOS	情報・メディア工学
DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY	発達科学
DOCTORAL DISSERTATIONS ON ASIA	社会系教育
EDUCATIONAL TECHNOLOGY RESEARCH & DEVELOPMENT	発達科学
ELECTROANALYSIS	生物応用科学
ERDE	社会系教育
ERDKUNDE	社会系教育
IEEE : COMPUTER GRAPHICS & APPLICATIONS	総合情報処理センター
INTERNATIONAL JOURNAL OF LIGHTING RESEARCH AND TECHNOLOGY	建築建設工学科

INTERNATIONAL JOURNAL OF PLASTICITY	機械工学科
INVENTIONES MATHEMATICAE	理数教育
JOURNAL OF ABNORMAL PSYCHOLOGY	発達科学
JOURNAL OF ASIAN STUDIES	言語教育
JOURNAL OF CHEMICAL THERMODYNAMICS	材料開発工学科
JOURNAL OF CHILD LANGUAGE	発達科学
JOURNAL OF CHILD LANGUAGE	言語教育
JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY	発達科学
JOURNAL OF MATERIALS PROCESSING TECHNOLOGY	機械工学科
JOURNAL OF MEMORY AND LANGUAGE	発達科学
JOURNAL OF PERSONALITY AND SOCIAL PSYCHOLOGY	発達科学
JOURNAL OF PORPHYRINS AND PHTHALOCYANINES	生物応用科学
JOURNAL OF THE ILLUMINATING ENGINEERING SOCIETY	建築建設工学科
LANGUAGE AND EDUCATION : AN INTERNATIONAL JOURNAL	異文化交流
LICHT	建築建設工学科
LIGHTING DESIGN + APPLICATION	建築建設工学科
NAEA NEWSLETTER	芸術・保健体育教育
NONLINEAR DYNAMICS	機械工学科
PHI DELTA KAPPAN	社会系教育
POLYMER BULLETIN	生物応用科学
PSYCHOLOGICAL BULLETIN	発達科学
PSYCHOLOGICAL METHODS(Q)	発達科学
PSYCHOLOGICAL REVIEW	発達科学
PSYCHOSOMATIC MEDICINE	発達科学
RESEARCH QUARTERLY FOR EXERCISE AND SPORT	芸術・保健体育教育
RHEOLOGICA ACTA	機械工学科
SCHOOL ARTS	芸術・保健体育教育
SCOTTISH GEOGRAPHICAL JOURNAL ← SCOTTISH GEOGRAPHICAL MAGAZINE	社会系教育
T.E.S.O.L. QUARTERLY	言語教育
TESOL MATTER AND TESOL JOURNAL	言語教育
TIJDSCHRIFT VOOR ECONOMISCHE EN SOCIALE GEOGRAFIE	社会系教育
ZEITSCHRIFT FUR GEOMORPHOLOGIE NEUE FOLGE	社会系教育
哲学研究	異文化交流
天涯	異文化交流
日語学習与研究	言語教育
方言	異文化交流

和雑誌

誌名	所在
DOS/V POWER REPORT	生活科学教育
DOS/V SPECIAL	生活科学教育
DOS/V MAGAZINE	生活科学教育

DOS/V MAGAZINE	情報・メディア工学
IDE 現代の高等教育	学生課
NIRA 政策研究	社会系教育
OPTICAL REVIEW	機械工学科
POSI	芸術・保健体育教育
SOFTWARE DESIGN	生活科学教育
ZOOLOGICAL SCIENCE	社会系教育
アジア経済	社会系教育
オプトロニクス	理数教育
音響技術	建築建設工学科
化学	材料開発工学科
家計経済研究 / 季刊	社会系教育
環	地域環境
基礎心理学研究	生涯学習
教育音楽 小学版	芸術・保健体育教育
教育音楽 中学・高校版	芸術・保健体育教育
教育と医学	芸術・保健体育教育
言語 / 月刊	言語教育
言語研究	異文化交流
現代化学	材料開発工学科
光学	電機・電子工学科
国語学	異文化交流
時刻表	学生課
社会学評論	行政社会
初等教育資料	生活科学教育
進路指導	学生課
ストーンテリア	芸術・保健体育教育
大学資料	学生課
大学と学生	学生課
地域研究論集	地域環境
中国語ジャーナル	知能システム工学
中等教育資料	生活科学教育
電子情報通信学会技術研究報告 集積デバイス	情報・メディア工学
日経 MAC	教育実践センター
日経エレクトロニクス	知能システム工学
日本音響学会誌 欧文誌	電機・電子工学科
日本教育新聞	芸術・保健体育教育
日本読書新聞	異文化交流
発達心理学研究	生涯学習
東アジアの古代文化	社会系教育
美術手帳 / BT	芸術・保健体育教育
批評空間第二期	生涯学習
部落	社会系教育
部落解放	社会系教育
法学論叢	社会系教育
法と民主主義	行政社会
マテリアルインテグレーション←ニューセラミックス	理数教育
文部科学時報←文部時報	学生課
理科の教育	生活科学教育

図書館この一年

【会議関係】	
< 附属図書館委員会 >	
13. 5.14	協議事項 (1) 平成12年度図書購入費執行状況について (2) 平成13年度図書資料(大型コレクション)収書計画調査について (3) 複合施設の基本計画策定W・Gメンバー選出について (4) 重複資料の廃棄について
13. 7.16	協議事項 (1) 平成13年度図書購入費予算配分(案)について (2) 平成13年度共同利用資料の選定について
13.12.18	協議事項 (1) 電子ジャーナルの導入について (2) 複合館(メディアコモン)計画に関して、附属図書館委員会への課題提起について
14. 1.29	協議事項 兼任教員制度導入について
14. 2.21	協議事項 電子ジャーナル導入に係るWGの立ち上げについて
< 五十年史編集委員会 >	
13. 4. 5	協議事項 「拡大期の福井大学」原稿について
13. 4.27	協議事項 (1) 「技術部」原稿について (2) 福井大学の創立」原稿について
13. 6. 4	協議事項 (1) 「工学部各学科」原稿について (2) 「附属図書館」原稿について
13. 7. 2	協議事項 (1) 「情報処理センター」原稿について (2) 「大学改革期」原稿について
13. 7.23	協議事項 (1) 「技術部」原稿について (2) 「工学部の全体史」原稿について
13. 9. 7	協議事項 (1) 「学芸学部時代」原稿について (2) 「教育学部の出発」原稿について
13. 9.20	協議事項 (1) 「工学部の全体史」原稿について (2) 「工学部各学科」原稿について
13.10. 4	協議事項 (1) 「福井大学の創立」原稿について (2) 「附属学校」原稿について
13.10.12	協議事項 (1) 「改組の時代」原稿について (2) 「1974～1999年の福井大学」原稿について
13.10.22	協議事項 (1) 「機器分析センター」原稿について (2) 「附属図書館」原稿について
13.10.31	協議事項 「学生部」原稿について
13.11. 9	協議事項 (1) 「紛争期の福井大学」原稿について (2) 「福井大学の創立」原稿について
13.11.21	協議事項 (1) 「保健管理センター」原稿について (2) 「工学部の全体史」原稿について
13.12.14	協議事項 (1) 「情報処理センター」原稿について (2) 「工学部各学科」原稿について
14. 1. 7	協議事項 (1) 「戦後教員養成の出発」原稿について (2) 「教育学部の成立と展開」原稿について (3) 「附属図書館」原稿について
14. 1.16	協議事項 (1) 「遠赤外領域開発研究センター」原稿について (2) 「附属学校」原稿について (3) 「新課程・大学院の設置から教育地域科学部へ」原稿について (4) 「学芸学部時代」原稿について
14. 2. 4	協議事項 (1) 「戦後教員養成の出発」教育学部の成立と展開」原稿について (2) 「技術部」原稿について (3) 『福井大学五十年史』の編集責任者の選出について (4) 五十年史編集委員会委員長の任期延長について
14. 2. 7	協議事項 (1) 「拡大期の福井大学」原稿について (2) 「工学部の歴史」原稿について (3) 「附属図書館」原稿について (4) 五十年史編集委員会委員長の任期延長について
14. 2.18	協議事項 (1) 「電気・電子工学科」原稿について (2) 「紛争期の福井大学」原稿について (3) 「保健管理センター」原稿について (4) 印刷仕様(案)について
14. 3.11	協議事項 (1) 「機器分析センター」原稿について (2) 「学生部」原稿について
< 館外 >	
13. 4.26-27	第52回北信越地区国立大学図書館協議会 (於: 金沢市 小平前館長・上木事務長出席)
13. 5.29-30	平成13年度国立大学附属図書館事務部課長会議 (於: 東京医科歯科大学 上木事務長出席)
13. 5.30	平成13年度福井県図書館協合理事会・総会 (於: 福井県立図書館 小平前館長出席)
13. 6.26-29	第48回国立大学図書館協議会総会 (於: 札幌市 小平前館長・上木事務長出席)
13. 7. 3	平成13年度福井地区大学図書館協議会定例会議 (於: 福井医科大学 西野総務係長、水上電子情報係長出席)
13. 8. 9-10	電子ジャーナル・ユーザー教育担当者研修会 (於: 千葉大学 水上電子情報係長出席)
13. 8.28	平成13年度福井地区大学図書館協議会夏季研修会 (於: 福井医科大学 上木事務長外6名出席)
13. 8.29-31	平成13年度図書館等職員著作権実務講習会 (於: 神戸大学 門情報サービス係主任出席)
13. 9.13	北陸地区国立大学附属図書館会計担当者会議 (於: 金沢大学 西野総務係長、藤田総務係員出席)
13. 9.14	平成13年度新CAT/ILLシステム説明会及び学術雑誌総合目録欧文編データ更新説明会 (於: 京都大学 塩崎雑誌情報係長出席)
13. 9. 3	平成13年度福井地区大学図書館協議会定例会議 (於: 福井医科大学 西野総務係長、水上電子情報係長出席)
13. 9.26-28	平成13年度NACSIS-IRデータベース実務研修 (於: 国立情報学研究所 木村情報サービス係長出席)
13.10.17-19	NAIST 電子図書館学講座 (於: 奈良先端科学技術大学院大学 藤田総務係員)
13.10.24-25	平成13年度全国図書館大会 (於: 長良川国際会議場 田中図書情報係長、水上電子情報係長出席)
13.10.24-26	Dublin Core とメタデータに関する研修 (於: 国立情報学研究所 塩崎雑誌情報係長出席)
13.11. 5-6	平成13年度北信越地区国立大学図書館研修会 (於: 福井医科大学 門情報サービス係主任、柳下情報サービス係員)
13.11. 6-9	平成13年度大学図書館職員講習会 (於: 大阪大学 藤田総務係員出席)
13.11.28-29	第14回国立大学図書館協議会シンポジウム (於: 京都大学 西野総務係長出席)
13.11.29-30	平成13年度北信越地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議 (於: 信州大学 上木事務長出席)
13.11.30	平成13年度国立情報学研究所公開講演会 (於: キャンパスプラザ京都 水上電子情報係長出席)
13.12. 5	平成13年度福井県図書館関係職員研修会 (於: 国際交流会館 木村情報サービス係長、水上電子情報係長、柳下情報サービス係員)
14. 2.19-20	大学図書館等情報化支援会議 (於: 国立情報学研究所 水上電子情報係長出席)
【主な出来事】	
13. 4. 9	平成13年度新入生に対する図書館利用オリエンテーション
13. 4.10-18	大学教育入門セミナー
13. 9.22	オープンキャンパス2001企画参加 ・おまえはもう打っている 君はケンシロウを越えるか ・絵はがきで見るふるさと探訪 ・オリジナルの"しおり"を作ろう!
13. 3.25	小島家文書の寄託契約更新締結